みましたが、やがて繪はがきの流行が非常な勢ひになつて、大概な品はドシドシ入つて來るので、餘り珍らしくなくなつて來ましたから自然と氣が乘らなくなつて、當今では繪はがき熱も殆んど下火になつて了ひました。

又私が少し計り畫を書きます事に就て、「高麗藏は畫が書ける」などゝ仰有る方がありますが、これは大に恐縮な次第で、私が畫を書くと云ふ事の始まりは、師匠圖十郎の娘さんたちが、野口小蘋先生に就て稽古をして居られる時分に私は墨をすつたり、筆洗を取替へたりする役で、始終傍に見て居たのを、師匠が「眺めて居るばかりではつまらないから、お前もお手本を書いて戴いたらどうだ」と云はれてそれからお手本を貰つて少し計り習つたまでゝ、其當時は多少勉強をしましたから、一寸したもの位は書けましたが當今ではちつとも筆を持つた事がありませんから、全

然書けないと云つてもいゝ位です、尙又私が油畫をやると云ふやうな事も噂になつて居るさうですが、これに就ては可笑しい話があるのです、それは私が始めて勸進帳を勸めます時、成べく師匠に似せて見たいと思ふ所から、小學校時代に習ひ覺えた畫學の筆法で、畫學紙へ向つて鉛筆を走らせて、光線を取つて辨慶の顏の拵へを書いて見たのです最初は寫眞を手本にして寫して居た所が、寫眞を見るよりは、自分が目に覺へて居た俤を思ひ浮べて、眉毛の引方目張りの入れ方、口尻の墨の入方などを書いて見ると、寫眞よりは一層よく似たので、顏だけでもおかしいと思つて兜巾をつけて衣裳を着せて見たのが初めで、色ざしをして見た所が自分だけには萬更拙くもないやうな氣がしたのでそれから興味を以て急に繪の具を買ふやら、布を買ふやらで、舞臺に用のない幕間に、果物の畫などを二三枚書散らして見たのを見

て、片岡十藏さんが亡父市藏さんの油繪を頼みに來たのには少し困りました。

前にお話した通り少しの間野口先生のお手本を習つて居たものですから、其當時益田香遠さんから印を二三個刻つて戴いた事があつて、又野口先生からも頂戴したのもありましたが、其時に印と云ふものは面白い者だと思つたのが初めで、其後畫は止めましたけれども、印材を集める事には頗熱心になつて、水晶、玉、鷄血、翡翠、鯱牙、水珊瑚、銅印、陶印など樣々な種類を寄せて、改めては數へた事もありませんが、今日では何百個と云ふ數になつて居ます。

話が大分長くなつた上に、堅い事ばかりですから、私の滑稽を二つ三つ饒舌をしてそれでお丁ひにしませう、私は舞臺で餘りトチツた事はない方ですけれど、宮戸座の開場式の芝居に、風呂場の長兵衛で水野十郎左衛門をして居ましたが、立廻り

をして居るうちに、一寸したはづみで槍の柄が鬢へ引掛つた爲に、鬢が三尺ばかりポンと飛んで、其上槍の穂が拔けて、刀の目貫が取れると云ふ散々なしくぢりでそれでも跡をやらない譯には行かないから、うしろを向いて鬢を冠り直して續けた事は續けましたけれど、もう見物が湧いて一幕ワヤにして了ひましたが、此時には流石にカーッとのぼせました、所が其後同じ興行のうちで、然も同じ箇所で又々鬢を二度まで飛ばしたのは、實に情けない位なものでした、さうかと云つて鬢がゆるい譯ではないので只呼吸を合せる時のはづみではねるのですから、いつでも鬢の飛ぶ所が極つて居たのもおかしいと、思ひました是は其以前の事だと覺えて居ますが歌舞伎座で『爲朝』の郎等をして居た時に、私が自分で言ふべき白をだまつて居るので、次ぎに居た新十郎さんが氣を利かして、私を救ふつもりで白を云つて呉れたの

が、少の間を置いて云つたものですから、見物の方では新十郎が忘れたのだと思つて「間抜け奴」と云ふ聲を掛けられたのは、實に氣の毒な思ひをしました。

是も歌舞伎座で『先代萩』の竹の間の腰元に出て居た時、堅いふん込み（腰卷の下へ履く股引）を履いて。前をキチンと合せて長い間坐つていたので、イザ立上る所になつて見ると、足がしびれて了つてどうしても立てないのです、コレは大變だと思つたから、一生懸命に立上つて見ると、ベタ〳〵〳〵となつて了ふ、コレではならぬと立上ると又ヘト〳〵として了ふので、とう〳〵仕方がなくつて、四つん這ひに這込んだ事がありましたが、此時には見物がドット笑つたので、私の耳へは其聲が割返るやうな騒ぎに聞へました、まだ失敗話では面白い事も有ましたけれど、急に思出せませんから、何れ緩りと考て置て、又其中にお話致しませう。

市川猿之助（舊俳優）

明治十二年の一月に私が大阪の芝居へ行く相談がまとまつたので、中島座でお名殘狂言をしました、此時の一番目が、『不知火』の狂言で、中村壽三郎などが出て居て、私の役が漁師の浪六と、大切に『五變化』を出し物にして居ました、此『五變化』は最初（關羽）で出て青龍刀を持つて一寸振があつて、それを引抜いて（年增）を踊つて、次ぎに玉川へ（粂の仙人で）落ちて來て兩面で天上界の口説があつて、是が雲へ乘つて上へ上ると、今度は花道から（傘の一本足）で出て、一本足の振事を見せて、一番終りに引抜いて稚兒になつて、八人の搦みを遣つて所作立を見せると云ふのですが、其中で尤も難義なのが（傘の一本足）で、是に就ては一寸苦心をした話が

あります、それはどういふ事かと言へば、是までにも一本足を踊つた人もありますが、誰でも下駄は二本歯の物を履いて出るのです、それを中島座の時には、繪看板へ一本歯の下駄を履いた繪を書かれたので、それが癪に障つて一本歯で演つて見る氣になつたのです、前方に喜昇座で彦十郎さんの演たのは、花道の間を素足で出て舞臺へ來てから二本歯の下駄を履いて、兩手へ晒し布を持つて調子を取つて、其上捕手を遣つて杖にしたのですが、それではどうも面白くないと思つて、初めから花道を一本歯の下駄で出る事にして、先づ家で片足を釣ッて、一本歯の下駄で歩く稽古を始めたのです、さうして一本歯の下駄で立留る事、一本足で何分位な時間を保てると云ふ事、花道で横ギハに落ちて一本歯の下駄の儘立上る事、舞臺へ來てから下駄を脱ぐ事、一本足でトンボ返りをする事などを、毎日々々稽古をして居ました

が只下駄を脱ぐのも智慧が無いと思つて、履いて居る下駄を蹴上げて、それを兩手で受取るやうにして見たいと思つて、それから下駄を蹴上げて見ると、どうして手に取れる所ですか、第一一本足に履いて居る物を蹴上げると云ふ事がむづかしいのです、さうすると親父が是を見て、「そんな眞似が出來てたまるものか」と云つたので猶更やつて見せやうと云ふ氣になつて、段々上手に蹴上げられるやうには成つたものゝ、蹴上げた下駄がうしろへ飛んで行つたり、右へ行つたり左へ行つたり、中々うまく手で受取る事が出來なかつたのですが、それでも飽きずにどうにかしてやつて見たいと思つて稽古をして居るうちに、熱心は恐ろしいもので、仕舞には、五度に一度は受取れるやうになつて來て、それが又三度に一度は受取れて來るとう〳〵十度が十度とも落さずに受取れるやうになつたので、當人は非常な得意

で居た所が、いよ〳〵舞臺へ出る事になつて、造り物の傘を冠つて見ると、今まで稽古をした時とは全然違つて、目の所で僅に切抜いてあるだけで自分の足元さへもよくは見えない位ですから、どうして〳〵蹴上げた下駄の飛んで行く方へ目を配るなどゝ云ふ自由が利かないので、殘念乍ら是だけは止めて了つて、舞臺へ來てから呼吸で足を拔いて下駄を脱ぐ事にして、其下駄を持つて一つ見得をするのは、此通り慥に一本齒で御座いますと云ふ事を見物の方へ見せる事にしてやつて居ました、それからもう一つ困つた事は、花道から一本齒で出て來ると俗に開帳場と云つて所作二重のダラ〳〵の上り口の所が歩けないのです、仕方なく初日には此開帳場を取つて了つて、一段トンと飛上る事にした所が、僅な事ではあるけれど、飛上つてトンと突く受足に大變な力がいるので、それが爲に足が疲れて了つて膝がガク〳〵するので、立留つて、居るとよろけるやうな氣がするのに、目はほんの前だけしか見えないので、何だか土間へ落ちさうな心持で怖はい所へ持つて來て、「是はかさいの源兵衛堀」と云ふ唄を、チリチン〳〵(三味線)トン〳〵(足拍子)の間を踏むのがこたへ切れないのです、尤も親父が「立ち切れない時の用意に坐つた振も拵へて置け」と云ふ事を敎へて呉れたので坐つて踊る振を覺えて置きましたから、たまら無くなつて早速坐つて踊つて、それから又立つてやつて見るとどうしても立つて居られないので、殘念乍ら又坐つて振事をして今度立たうと思ふと、傘の下へぼろ隱しに下げてある裂を踏んまへた爲に、みごとにうしろへ引くり返つて、土間の中へ轉がり落ちて了つたのです、自分でもシマッタとは思つたが何分にも、一本足の事で身體が自由にならないから上る事が出來ない、尤も親父が初日の日には遠方へ行つて留

守になるので、初日には一本足は出すなよと、言付られて居たのでしたけれ共、たつて頼まれて演つて見ると、まんまと首尾よく仕損じて了つたので、カーッと逆上上つて了つて居ると、それでも土地に顔が馴染になつて居る有難さには、格別惡落も出ないで、見物が手傳つて花道へ上げて呉れましたから、起上つてやり直さうと思つても、どうしても足が利かないで、立たうと思つてあせる程、猶更立てなくなつた、後見に手を取つて貰つてやつと立上ると、又ペタ〳〵となつてしまうので、自分乍らも見つとも無いとは、思ふけれども、何うにも斯うにも仕方がなくつて三枚目で舞臺まで這つて行きました、それから又後見に立たせて貰つて、合引を當がつて少し休んで、新規に足を慣らして踊つたのですが、二日目からは親父に見て貰つて下りの、裂れを短かくして、無事に勤める事が出來ましたが、一寸した事でも、

心得のあるものだと思つて、おろそかには出來ない事が分りました。

中島座のお名殘狂言を打上げて、三月一日に大阪へ乘込んだのですが、散髪で上下を着たのは此時が初めてだ、と云はれました夫から富田屋で延若に手を取つて貰ひましたが、此時の劇場は戎座(大西)で、顔觸れは延若が座頭で、璃寛、嘉七などゝ云ふ所でして、さうして狂言は勝能心が書いた物で、私の役が鬼玄丹と云ふので槍の立てがありました。

其次ぎ興行は大立物が拔けて、若手ばかりの腕競べと云ふ芝居でしたから、私の身になると天下分け目の戰で、東京の名折れになるかならないかの境ですから、先づ手見世として『五變化』を出す事にした所が、大阪ではずつと以前は嵐三五郎と云ふ人が一本足をした切りで、其後此役を勤めたものが無いと云ふ事で、前景氣は大

變によかつたのでしたが、風邪が元で息切れのする病氣に掛つて出られなくなつて了つて興行師の三榮さんが初日をのばして呉れたのです、又醫者も當分舞臺へ出てはいけないと云つたのでしたけれど、さう〳〵延ばす譯にも行きませんから、無理から開ける事にして、大阪の風習として總淡ひに客を呼んで見せると云ふ事があるので、昔は大立物が見物をして居つて一々小言を言つてそれで敎へはしなかつたので、此總ざらひの爲に役者の藝が上つたと云ふ位なものなのですが、其式に倣つた總ざらひをして見やうと云ふので、六月の二十二日と云ふのに、茶屋々々から馴染の客を招待する事にした所が、其日に大阪役者が半分の餘も見物に來たのです、私はいよ〳〵曠の場所だと思つて、一生懸命に勤める氣でしたけれど、何を云ふにも骨と皮ばかりの有樣で、押して顏を拵へて衣裳を附けて出ると云ふのでしたから、

其苦しい事はありませんでしたが、前にも言つた通り最初、唐裝束の拵へに、赤塗りの顏を冠つて、澤山に髯を生やして居る闘羽で出て、其大拵へだけでもいゝ加減に疲れて居る所へ、引拔いて黑の羽織に小紋の拵への年增になつて、まゆ玉を持た振事があつて、是からまゝりの件を踊らうと云ふ時に氣が遠くなつてベチャ〳〵と坐つて了つたのです、此時には段々暗い細い穴へでも入つて行くやうな心持がしました、それで私が病氣と云ふ事は前々から知れて居たのですから、一座の芝雀さんが加賀の雀藥と云ふのを部屋へ取にやつて呉れて、其氣付をのまされて呼生けられて、始めて氣が付て之は大變だと思つたが、勇氣を付けて「よろしい！」と云ふので又踊り出したのですけれど、此時には腹の中で天道樣佛神樣を祈つて、「どうぞ無事に舞臺の勤まりますやうに」と、其事ばかり思つて居りましたが、まゝりの振りのう

ちで中足で舞臺を襷に歩くのが此踊の見せ所で、それをどうやら斯うやら仕遂げたので、私が病中を押して働いて居ると云ふ事が、不憫持てがしたのです。

それから一度引込むと、仕出しが出て雨が降つて來て是が入ると、私が桑の仙人で落ちて來て、仕出しの神樂師の假面を遣つて兩面を冠つて、口說の振りが仕事なので、此のしぬきを仕舞ふと迎ひの雲へ乘つて上へ上り、跡が布晒の間に拵へをして出る手順なのですが、仙人を終つて樂屋へ入つて來た時には、もう〳〵虫の息になつて了つて、我慢にも何をする事も出來ないで、ぶつ倒れて了ふと、三榮さんが大變に心配して、今日は是で打出さうかと、云ふ事でしたが、しかし見物は一本足を眼目に來て居るのですから、私もどうにかして演りたいと思つて、口上を言つて少しの間待つて貰う事に賴んで、部屋に寢て居ましたが、見物の方でも、「待つて居

るから見せろ」と云ふ意氣でしたから、私は休んで居ても氣が氣では無く、切思つて飛起きてシコを踏んで、柱へ兩手を掛けて力をためして、其上トンボ返りを打つたので、そばに居る者は私が氣が違つたのだと思つたさうです、「これでよろしい！」と云つて鏡臺前へ坐つて、ブル〳〵震へ乍ら眉毛を引いて、息の切れるのにも構はず傘の拵へをして、一本齒の下駄を履いて花道へ出て、何が何やら夢中のうちに、漸くの事で恙なくやり終せて部屋へ入つた時には、ヤレ嬉しやと思つて又倒れて了ひましたが、翌日すぐに初日を明けて無理から三日間打つたのを、太夫元が心配をして呉れて、一週間休んで養生をしてから、七月一日に返り初日を開けた所が幸ひと非常な大入で賣切れを掛けました。

それから暫く大阪に居たうちに、十四年の二月中座へ出勤して、その時の狂言が

『川中島』で、多見藏の山本勘助、橘三郎の鬼小島彌太郎、瑞寛の上杉謙信と云ふ役割でしたが、同時に角座で右團治さんが蝙蝠の宙乘りを見せると云ふので、中座の方でもそれに對するケレンを見せやうと云ふ事になつて、三榮さんが親父の所へ相談に來られて、狂言作者に筆を執つて貰つて、私の役で忍術遣ひ大九郎と云ふのを書足し、謙信の舘へ忍び込むと云ふ所を見せ、最初門外で松の木へ飛上つて屋根へ飛ぶ仕掛をして道具が廻ると廊下の欄間へ鼠の縫ぐるみで現はれ、欄間の襷を走しつて見せ、仕掛でさかしまに柱を傳つて舞臺へ下り、鼠狂ひをして花道のスッポンまで行つて引抜いて、忍び四天の姿になり、人に見えない心で見廻りの間を縫つて歩き、引道具になつて段々寢所の方へ行つて、對立のうしろへ消へると、今度は寢所の次ぎの間の鎧櫃から出て寢て居る謙信の傍へ忍び寄り、勇氣に恐れてタヂく

くとなるので、謙信が目を覺まして「曲者ッ」と呼んで二人の立廻りになつて、トド謙信の鐵扇で眉間を打たれると、爰へ大勢が出て立廻りのうちに、大九郎は姿を消して逃げる、又道具が替つて裏手の水門から出るのを、熊手と梯子を使つた大立廻りになつて鐵砲に當つて死ぬと云ふ趣向で、是が大變な評判になつて大入を占めました。

秋月桂太郎

（新俳優）

私の主義として、個人の成功よりも場面の成功、場面の成功よりも之を擴大して劇全體の成功を期して居るのです、今日まで朝日座に旗幟を飜へして以來九年の間、いろ〳〵の經驗に依つて研究をいたしました、或は舊派の人と合同をして互に長短の才を研讃しました、要するに舊派の人の女形に於て成功をされ、立役に於て失敗をされました其の原因はといふと平素の素養にあるのです、新派の者は須らく讀者をして廣く諸般の藝術を探究して居るから從つて舞臺に出ると役その者に同化する場合が多いのです、而して新派の者には意氣込の素養があるから舞臺の意氣込が甚だ調和能く運ぶ、そして快心の舞臺が出來る、これ舞臺の成功であります。

何も舊派の人には個人的の成功を期する人が多いやうな傾きがあります、例令は、此の幕は自分の觀せ場であるから一人で幕を切りたい、切らして呉いといふやうな消極的な注文をする、言葉を換へれば個人としては積極的であるけれども劇イヤ其の場面から云ふと頗る消極的な考へじやありませんか、唯、自己の舞臺に於ける威嚴イヤ俳優としての價打を示したいといふ淺薄な考へのやうに思はれます、が併し中には能く考へて居る人もあります延次郎君や我童君などは感心です、成太郎君などは仲々新派劇は巧みですが稍ともすると前述の惡い癖があるやうでした、一體、劇に於て他の役を自己の爲めに犧牲にするといふ事は絶對に不賛成であります、能く劇全般の爲めに役を犧牲にする事はあります、私などは自分の役が惡くなつて場面の成功を期する爲めに犧牲に供する事が度々ムいます、それから臺詞の抑揚に重

きを置いて居ります、臺詞といふものは役そのものは同化する點に於て頗る大なる關係を有して居るので、臺詞の抑揚と緩急に據つて喜怒哀樂の情が舞臺に現はれます、又熱のある、人物であるか、冷やかな人物であるかゞ明かになります、私は臺詞の研究を思ふて淨瑠璃を稽古したのです、無論身體の養生法もありますが一つは商賣上の研究精神の慰安を考へたからなのです、何うして慰安になるかとお尋ねですか、斯うです、淨瑠璃を語つて居ると文句の中に意示表情の臺詞があります、是を語つて節廻しやら抑揚が巧みに出來ると此の意氣込と思ふと何とも云はれん愉快なのでいつか是の意氣込を用ゐて遣らふと胸の裡に浮ぶのです、爾う です新派の中で臺詞の抑揚緩急の旨いのは矢張り高田君でせうか、彼の人は御承知の通りの身體ですからヌッと舞臺へ現はれると大向ふは高田と叫びます、そしユ相手の役者の

呼吸を計つて臺詞をいふ、其の意氣込と云ひ臺詞の緩急と云ひ少も油斷といふものはない、素人目にはヌッとして居るから隙があるやうですが仲々隙がない、此方の意氣計りを覗つて居る、そして觀客をチャームする事が頗る巧みなのです、ヌッとして誰も知らぬ中に細密な表情と巧緻な藝當をするつまり綽々として藝に餘裕があるのです、で未熟な淺薄な考へ者のは高田君の藝風を眞似て得々として居るものがある、けれども、夫は高田君其の人の皮想斗りを盜んだので眞の藝を會得したでのはありませむ、私の門下にも一人あります、名前ですか、岡本といふのです、只今ちや京都の靜間君の座に居ります、文筆の才もありますし、劇に對する理想も高い、前途有望の男ですが藝風と云つたら所謂高田式のヌッとした處に私淑して居ります、丈も體格も高田君と同樣で上脊はあり肉も相當にある、舞臺へ出ると二度の

高田と大向の者が冷評する、鳥渡見れば高田君の通りですが、併し眞に高田君の長所を採つたのではないから舞臺の上では間延びがして臺詞の緩急に觀客の感動を買ふ事が出來ない、最も日の淺い役者ですから仕方はないです、で私は始終嚴しく戒むるのです、お前のは高田君の鷹揚な處を眞似て臺詞の巧みな處と態度の緩急自在な巧緻な處を充分に會得しないからいつも失敗に終るので、例令ば、高き山を登るのに或者は一歩三尺の歩調を以て上る、すると其跡から他の一人は矢張り一歩三尺の歩調を以て上る、流汗淋漓、氣息奄々として前者に追つく事が出來ない、で前者を乘越さんとならば須らく別の方面より新工夫の歩調、否斬新な考案を以て一歩四尺の程度の歩調を利用したならば決勝點に於て勝者の月桂冠を戴く事が出來る、スタートに幾何の遲刻が有ても到達の時が早くなる譯ではないかと戒飭して遣りま

す、生意氣のやうですが私は藝道に於て此の意氣で進んで居ります、ですから彼の人は瀟洒たる長所を以て成功をし、俺は濃厚なる長所を發揮して成功をしやうと、技の長短と工夫の相違を辨まへて進むのが何よりの捷徑と信じて居るのです、是は私が技藝に於ける主義と見て可なりでありますよ、高慢のやうですが畢竟するに、高田君の藝風を敬愛する處より考へ及んだ意見なのです、それから新派の劇に必要なのは自然不自然といふことなのです、十人面が違ふと一般で心の中が違つて居る、新派の劇界では自然といふ事を誤解をして居るものが多い、殊に地方の劇界に居る素養の少ない輩に多いやうです、筋の自然といふ事は頗る必要な事です、併し自然々々とかぶれて舞臺の上の藝術美といふ約束を忘れて仕舞ふのは藝術家としては謬見だらうと思ふのです、審美上より云ふたらば醜美といふ事と寂美といふ事が

あるでせう、私は寂美といふ點よりも優美の方を採ります、餘り寂しいのは觀客の目を喜ばせる事が出來ない、花やかなものは飽が來る、といふ事を云ひますが遣り口さへ違へたらば爾うではないのです、餘り舞臺の上を自然化さうとして寂しくする虞があります、が私は自然の裡に派出に賑やかに遣らうと思ふのです高田君の遣り方も爾うらしいのです、筋の不自然は絶對に不可です、何となれば劇全體の興味を殺ぐのです、何蚊と云つてまだ〳〵觀客の劇に對する程度が低いので其の趣味に同化した筋の物を選び、そしてそれを文學的作物として多少の價値あるものとして上場するのが演劇向上の何よりの手段であらふと思つて居ります。

市川左團次

（役俳優）

私が洋行の主意ですか、イヤ別に取立て、申す程の事はありません、只田舍者の東京見物位に思召て下されば宜しいのです、しかし多少は期する所の無いでもありませんが、まア〳〵其方は暫らくお預りとして置て、まだ何方にもお話をしませんから、道中の模樣を少し計り云つて見ませう、先づ郵船會社の鎌倉丸に投じて、横濱を出發して神戸へ着し、夫から瀬戸内海の美くしい景色を眺め乍ら門司へ行きました、所が此時は天候不穩でした、それで乘組員の或者は向ふの馬關へ渡つて、盛んに豪遊を試た事などもあつたやうでしたが、私はまだ大宰府を見た事がない爲に、是へ見物に行うと思つた所、それは都合上止めにして、汽車に投じて箱崎の八幡樣

へ參詣に行き、蒙古襲來の古跡を見て、更に車を飛ばして博多をかけ廻り、丁度日没頃に門司へ歸つて、翌朝快晴になつて鎌倉丸は恙なく出發しました、此時の一等船客は佛國へ行く陸軍の軍人と、獨逸へ行く陸軍の軍人と、加藤時次郎氏の夫妻と、日本銀行の柳谷氏と私だけでした二等船客には獨逸へ行く御醫者樣が澤山に乘込んで居たやうです、夫から船は追々と進路を捗取つて、名にしをふ玄海灘へ差掛りますと、生憎の風雨に出會つて船が搖れ出しました、さうすると同行の加藤氏は船に弱い人で、早速醉つて了つたのでしたが、私は體は搖れ足はよろけるにも拘らず、少しも目まいなどはしないのです、其癖東京に居て船の經驗があると云ふのではないので、船と云つたら高々品川沖へ漁に行つた位なものでしたから、定めて苦しむだらうと思つて居たのと實際とは大違ひでした、或は船に經驗の無のが却てよかつ

たのかも知れませんけれど、何にしても初めての航海としてはろら過ぎて、お話にならない位な始末でしたから、毎日外の人たちは食事をしない者がある中で私だけは三食を缺かした事はありませんでした、夫からずつと行つて其次が臺灣海峽です、爰も波の荒らい所で、船客は何れも頭痛鉢卷でしたが、併し玄海灘から比べるといくらかい、やうに、思ひました、海上一週間計りで上海へ行つて、有名な楊子江へ入りました時、ボーイに言付て風呂を立てさせましたが入つて見ると驚いた事には全然泥水です、心持が惡くつて到底入つて居られませんから、ボーイを呼んで小言を言ふと、楊子江の水が濁つて居るのだから仕方がありませんと言はれて、夫から水を見ると成程悉く泥水なので、今更それを知らなかつた迂濶を悔ひましたが、是がそも〳〵赤毛布の始りです、しかし爰の景色は中々いゝ眺めで、兩側の堤に柳が

並らんで居る間を、笠を冠つた男が牛を引いて行く所などは、とんと生きた唐畫を見るやうな心持でした、其川口で支那の軍艦が錨を下ろして居るのを見ましたが、何だか小さな軍艦でおもちやを見るやうで同乘の陸軍々人たちと話合つて大笑ひをしました、爰で鎌倉丸は一晩碇泊をする事でしたから、ともかくも上陸はしましたけれど、生憎の雨降りで見物に歩くのはたよりが惡い爲に、先づ芝居見物に出掛けました、其時の狂言は三國誌だと云ふ事でしたけれど一向に分りません、それと云ふのが幕が締まらないので、おしまいになつたのかと思ふと、又すぐに俳優が出て來る、是が前の續きかと思つて居ると、どうも違つた狂言のやうにも思はれると云つたやうな譯で、頭だか尻尾だか前後が分らないので、二時間計り見物してそこを出で此晩は日本人の旅館へ宿を取りました、其翌日は街を見物しましたが、只風俗

が變つて居る樣に感じたゞけで、格別驚く程の事はありませんでしたが、其中で巡査だけは黑んぼで見上げるやうな偉大な男ばかりが揃つて居るのが目につきました、とかくして、午後に船へ歸つて夕刻出發をして、夫から先は何事もなく香港へ着しました、實の所を言ふと上海へ先つた時は、多く支那人の家計りで餘り綺麗でありませんでしたから、割合につまらないものだと思つて居ましたが、香港へ來て見るとずつと樣子が變つて來て、成程立派なものだと思つて一寸驚いたやうな譯です、此承知の通り香港は英國領ですから、穢い支那人の家などは片隅の方へ押つけられて居て見えません、私が此地へ上陸した時が丁度クリスマスの當日で正金銀行へ行きましたら休業でしたから、郵船會社へ行つて問合せをすると、そこへ銀行員が出向いて下すつて用事を辨じて、夫から日本人の倶樂部と云つた樣な所へ行き

ました、爰で領事に面會して共々に牛鍋の御馳走に預つたのは嬉しく思ひました、さうして支店長の案内で街を見物に歩きましたが、クリスマスの爲に大概な店は休んで居ました、其足でビクトリヤの山へ汽車で上つて見ましたが、是は綱で引く仕掛けで、まだ日本に無いだけに素晴しいものだと思ひました、先づ此ビクトリヤ山などはさしづめ赤毛布の行つて見る所です、又此土地には支那人が二人でかつぐ駕があります、是はとんと箱根で外國人を乘せて行く椅子の樣な式に出來て居て、かつぐ棒が臂掛けの樣になつて居るだけ、此方が危くなく且つ乘心がいゝのです、私も是を雇つて競馬場などを見物して、其脇の掛茶屋へ憩つて茶を飲みましたが、此駕舁きの支那人に聞て見たい事もいろ〳〵あるのですけれど、扨聞た所で向ふの言葉はこつちへ通せず、こつちの言葉は先方に譯らないのですから、無據默つて居

る所などは情けない有樣です、夫から繁華な街へ差掛ると盛んに爆竹花火を打上げて居る、又何國の軍艦が着いたので大勢の水兵が隊を組んで歩いて居ると云ふ有樣で、殆んど往來が通り切れない位でして、其晩は支店長の家へ泊つて支那料理の御馳走になりました、翌日は公園の方を散歩して日暮に船へ歸り、翌朝解纜してシンガポールへ向つて、無事に到着したのが丁度大晦日の晩でした、船中で同人會の御醫者樣と親しくなつた緣で、其人にすべての案内を賴みまして、同船の岩佐病院副院長と三人で上陸をしましたが、シンガポールで同人會の御醫者樣を抱へると云ふ遠藤の主人が、私共を大變に優待して下すつて、先づ馬車を雇つて植物園へ連れて行つてくれました、折から蘭の花などが盛りで非常に廣々とした所です、此足で椰子畑へ行きましたが、是は木へ登つて其實を打落して取らせる事などがあつて面白

いと思ひました、夫から海濱のホテルへ行きましたが、日本と違つて夏の事ですから中々熱かつたのです、さうして案内者の遠藤さんの別莊へ行くと、そこの家の近所に病人があると云ふ事で、幸ひ御醫者樣が御出でなすつたのなら、是非共診察を願ひたいと云つて來たのです、夫から私共と一緒に居た同人會の醫師が診察に行く事になつたのですが、私にも一緒に行つて見ろと云ふのです、しかし私は醫師ではなし、まして、病人の傍などは御免蒙りたいと云つたですけれど、まア〳〵行つて見玉へと云ふ樣な調子でとう〳〵診察のお供をして行つたのは餘り感心しませんでした、病人の家と云ふのは此別莊のすぐ傍でマレー人の家で、病人は口が利けないのです、醫師の見立では中風でもう助らぬと云ふ大世話塲でした、其家は金持ださうですが、家が廣い計りで誠に穢い所でした、けれ共何かの時の大道具にでも用ひ

られさうな氣がして、よく見て來ましたから損はありませんでした、此晩に碩田館と云ふ旅館へ在留の日本醫ばかりを集めて、日本食で夜飯を認めましたのは一寸珍らしい氣がしました、夫からホテルへ歸つて寢臺へ寢ましたが、翌日湯へ入らうと思ふと湯はなくて、水を浴びるやうに出來て居ました、尤も時候が暑いのですから差閊はありませんが、何だか不自由なやうな心持でした、此日が元日に當りまして寒暖計は八十五度位でしたらう、私は新らしい單衣物に着替へて、遠藤さん(藥店)の二階へ行つて例のお醫者樣なども共々お雜煮を祝ひました、それから汽車に乘つてジョホールと云ふ所へ向ひました、ジョホールは小國ですけれど、一つの王國になつて居るので、日本で云つて見ると一寸箱根湖水の塔が島に似寄つた景色のいゝ所なので、一時間計りで行かれる所です、先づ政府附のホテルへ入つて食事をしま

したが、中々立派なものでした、爰を出て王宮を拜觀する筈で車へ乘つて行くと、紹介者がなければ許さないと云つて斷られました、早速手蔓はありましたが態々紹介人を頼むでもなからうと云ふので、御城の庭を見物してほとりの寺院へ立寄りました所、此寺には水業の場所などが出來て居ました、此歸りに罪人が道普請をして居るのを見掛けましたが、鐵の鎖に繼がれて首かせや足かせを箝めて居る者があつて一寸おもしろく……罪人を見ておもしろいと云ふのも變ですけれど、……日本の刑罰に思比べておもしろく感じたのです、此歸りにマレーの料理をたべました事は、慥か時事新報へくはしくお話をしたと覺えて居ますから略します、二日の朝船へ歸つて海路十日間計りでコロンボへ着しました、此地には釋尊の墓があると云ふのを聞て、乘船の日本人一同是を見物に行く相談がまとまりました、宰領は加藤時次郎

氏と事が極つて、一バウンド即ち十圓で往復の馬車から食事までを受合ふと云ふので早速案内者を雇つて二頭立の馬車を拵る、中には女連さへ加はつて出る時の勢ひは大した景氣でした、夫から汽車へ乘移つて、四方山の話を語合つて居ましたが、此間が二時間も掛るのに折柄の大暑で一同はうだつて了つて、釋迦の寺のある所の一つ手前の停車場で下りたのは、そこに在る植物園を見物する爲でした、此植物園は花物が多く咲亂れて油繪でも見て居るやうに美くしい、其上いゝ香りがして清々するやうな心持でした、爰で又馬車を雇つてカンデーと云ふ所の釋迦牟尼尊の墓のある所へ着しましたが、行く道々へ目を配つて見ると、此土地はマレー人計り住んで居るやうな樣子でした、しかしこんな所に迄道路に下水の整つて居るのは流石に文明國だと思つて感心しました、所が肝心のお釋迦樣の御墓と云ふのを見ると、印

度式の石像ですけれど一向につまらない、其上赤だの青だのゝ繪の具が塗つてあるなどはいやでした、さうして一々錢を取ては一つ〳〵に見せて行くので、一同飽きが來て了つて、見物よりは午飯の方へ氣が進んで所のホテルへ行きました、さうして品書きを見ると朝の食事の物計りで、午飯の物が一つも書てありません、ボーイを呼んで聞て見ても是が午飯だと云つて居るのです、致方なしに朝めしの物を食べて再び汽車に乘つて以前の停車場へ着くと、今度は馬車が無いと云ふのです、宰領の加藤氏は案内者を捉へて不注意を責める、一同も口を揃へて案内者攻擊を始める、中にも加藤氏は宰領だけに一同の手前へ對しても默つて居られないので金を取つて置乍らこんな不都合な事があるかと言つて、洋杖を振廻して怒り立てゝ居るのを、漸く一同が押なだめて、兎も角も案内者に馬車を探させにやつて、やつと一臺あつ

たのを連れて來て、是へ婦人連と加藤氏を乘せて先へ歸して、私共の殘り連中は知らない路を歩くと云ふ心細い事になりました、其うち案内者が牛の引く車でよければありますが、まさかにそれへはお乘せ申されませんと云ふのです、けれ共草臥て居ますから牛車でも何でも構はないから連れて來いと命じてそれを雇ふ事にしました、是が四人乘りで殘つた人々が乘つた事は乘つたやうなものゝ、何となく具合が惡い計りでなく、牛の歩みですから一向捗が行きません、乘つて居る連中はぐづぐづ言ひ始める、イヤハヤ迚も東京では見せられない圖だなどゝ言つては笑ひ興じて居ると、馭者は遲い惡口を言はれるのだと思ふ所から、一生懸命になつて牛の尾を叩いてあせつて居ます、いくら叩いても蹴つても一向早くならない、乘つて居る客はいよ〳〵騷ぐ、馭者はます〳〵夢中になつて大車輪で尻を打つと云ふ有樣で、牛

は腹を立てゝ動かなくなつて了ふ、それが爲に往來へ人立ちがすると云ふ事になつて、いよ〳〵赤毛布の本性を現はしていゝ闘ではありませんでした、それでも案内者が一生懸命になつて馬車を探して來て呉たので、ホット息を吐いて夫へ乘り替て歸りましたが、實際此時は大滑稽でした、其次ぎに船中で二等船客であつた御醫者樣連中と、コロンボの有名な公園へ見物に行きましたが、水道の元に瀧があると云ふ事を聞て、序でにそれを見やうと云ふ事で、一同うしろの山へ登つて行くと、成程日本では日光で見た位な大きな瀧が轟々と響いて落ちて居て、其前に祠があつてそこの石の上に、僧侶が六人計り座禪を組んで居ましたが、頭は坊主にして額の所へ金粉を塗つて腕輪をはめて、眞黑な着附の上へ、腰の方だけ眞白な裂を卷いて瀧に向つて居るのです、つまり樹下石上に心念を凝らして居る有樣で、一種氣高いや

うな感じに打たれましたが、木々の梢には手長猿が下つて居るものあれば、普通の猿が木へ登つて枝へ飛び移つて戯れて居るのもあり、又生れた計りのやうな小猿が何疋となく出て來て、僧侶の周圍を廻つて居る所などは、全然畫のやうな心特がしました、さうして其小猿に石を投げると揃つて逃げて行くのなどは大變おもしろいと思ひました、此見物を濟せて宿へ歸つて見るとまだ日が高いので、もう一度何處かへ行つて見たいと言ふと、同行者のうちに案内記を調べたものがあつて、極樂寺と云ふ寺のある事を知つてそこへ出掛けました、此寺は支那風の建築の大伽藍で、大きな池があつて丁度蓮の花が咲いて居ましたが、驚ろいたのは實際疊半疊敢計りの龜の子がうぢや〳〵泳いで居るのを見ました、此寺は海に添つて居るので石段を昇ると海が見えますし、擊いである船なども一目に見下ろせますし、又一方には椰

子林も見えて中々景色のいゝ所です、此晩に宿屋の主人を通辨に連れて、マレー人の芝居を見に行きましたが、小屋は常小屋ですが日本の田舍芝居よりも穢いやうでした、しかし演劇は一寸西洋風でバイオリンなどを遣つて演つて居ましたが、宿屋の亭主(日本人)の言ふには、此狂言は鷄を盗むのが初りで其嫌疑を受けて、罪を問はれると云ふ筋だと云ひますから、其つもりで見て居るといつ迄過つても鷄が出て來ないので、どうもおかしいと思つて、再び主人に尋ねて見ると、イヤ何でも鷄と云ふやうな言葉を言つた樣に思ひましたが、是は私の間違で御座いました、此狂言は若い男と若い女が戀をして居る筋で御座いますと、其位な事は誰れが見ても直ぐ分ることを言つて、一向要領を得ない所を見ると、此主人にも譯らないらしい樣子で飛んだ通辨を連れて來て大失敗でした、見物の中には大分西洋人も居ました、棧

敷は寄席の二階席のやうになつて居て、下はずつと椅子が並んで居る有樣でした、此晩は宿屋へ泊つて、翌日出航しました、其の後慥スエズの運河を通る時、いゝ月夜の晩でしたが英國の船に逢ひましたから、此方から「萬歳」の聲を掛けると、向ふの船からも「萬歳」は譯るものと見えて、やはり「萬歳」の返禮がありました、航海中四面に陸の見えない大海原の中で、船に行逢ふ嬉しさと云ふものは、航海をしない者には迚も分らないだらうと思ふ位です、それですからたとへ他國の舶でも、途中で行逢ひさへすればお互ひに聲を掛けたり、ハンカチーフを振つたりして喜こび合ふのです、夫から又海の上に十幾日を費して印度洋航海をしたのですが、印度洋は波が靜かだと聞て居た割合に搖られました、ともかくも長い間の事で、何處を見ても目に遮るものは水ばかりなのですから、一同がもう船に飽きてしまつて、寄

るとさわると食物の話ばかりで、月の夜などは一同デッキへ涼みに出で、ヤレすしが食べたい、しるこが喰ひたひ、中には、アライで一杯やりたいなどと云ふ人もあつて意地の穢い話ばかりです、とかくしてポートサイドへ着しましたが、爰で石炭を積込む爲に締切つて了ふのと、時間の僅な爲に上陸する事が出來ないで、すぐと拔錨して地中海へ入りました、地中海は此時分が穏かでいゝと聞きましたが、生憎の風雨に逢つて又船が搖れたのです、爰でおもしろいお話があります、それは加藤氏が船に弱い所から、村井弦齋居士の發明された眩暈よけを用意して居て、此時それを取出して顔へ掛けましたけれど、一向に利目がないと云ふので肝癪を起して、とう〳〵それを破つて了ひましたが、跡でよく〳〵聞て見ると、是は船の動き出さない前に顔へ冠つて、すべての動く物を見ないやうにするのだと分つて大笑ひをし

ました、又同船の高田氏も頗船に弱い人で船が動くとすぐと寢て了ふ方でしたから、誰言ふとなくパラメイトルと綽名を附けて居ましたが、二等船客の中に一寸小綺麗な洋婦人が居て、外の船客はこれだけが無聊中の樂しみだと冗談を言つて居ましたが、此婦人が高田氏の名をパラメイトルと云ふのだと思つて、パラメイトル〳〵と呼ぶので高田氏は怒つて居ましたそれから、又幾日かを海ばかり見て明し暮らして居るうちに、遙に伊太利亞の海岸が見えた時には、一同異口同音に聲を擧げて喜こびました、近づくに從つて眺めると、伊太利亞の景色は日本の風光に似て居る所があるやうで、山の上に城の聳へて居る所などは中々な絶景でした、此航海中にシ、リーの噴火山を見ましたが、晝のうちは只煙の出て居るだけにしか見えないと云ふ話ですけれど、私共の通りましたのは幸ひ夜の一二時頃でしたから、其時は寢ずに

居て噴火山を見ましたが、其模樣を言つて見ますと、遠くから見た所で、二三尺位な太さの火が息を吐いて山の頂上から吹出すので、其吹出した火が山へ落ちて下へ流れ落ちる所は丁度火の瀧のやうで少しもかすれずに、どつと落ちる勢ひは美觀と云ひませうか、奇觀と云ひませうか、實にすさまじい有樣でした、しかし船員の語る所に依れば其日は火が少ないのだと云ふ事でした、此山は絶へず噴火して居るのですから、航海者は晝夜の違ひこそありますけれど必ず此噴火山を見る事は出來るのだと云ふ事です、夫からいよいよ目的のマルセーユへ着く事になりました、出發當時に郵船會社の豫定が三十一日間と云ふ事でしたのが、三十日目の朝着したのですから、一日早く着した譯です、此日には平日は八時までも寢て居る寢坊の私が、六時半と云ふに飛起きて先づ便所へ行つて眺めるとあたりは、畫に書いた蓬萊山の

やうな岩が澤山にあつて、その間から旭が昇る景色が何んとも彼とも言はれない美くしさなのです、此長い航海中に日の出の昇る所を拜んだのは恐らく私一人でせうと思つたから、實に好運な事だと喜こび勇んで、一同に向つて私は今朝いゝものを見たと云つて話すと、何を見た〳〵と云ひますから、まだ誰れも見ないものを見たと云ふと、何だ〳〵と聞きますから、大自慢で日の出を見た事を誇つた所が一同は吹出して了つて、日の出は天氣でさへあれば毎朝拜める、お前さんは今日までいつでも八時でなければ起きないから、それで日の昇る所を今朝始めて見たのだらうと云はれて、成程それに違い無つたので、すつかりへこんで了つた事がありました。

小織桂一郎

（新俳優）

私の本姓は西卷行藏、明治二年生れですから今年は丁度四十一です、郷里は越後の柏崎で實家は土地では可なり知られた家柄だつたのですが私の八歳の時、家族は東京へ移つて濱町の二丁目に住で、父は米屋町へ手を出し失敗しました、私は家に居ず下宿をして小學校を出てから神田の共立學校に一年、成立學舍に暫く居て又其頃築地の立教大學といつた學校へ移り茲で一年計し居て大學豫備門への入學試驗をうけて及第しましたが、とう〳〵一度も登校せずに退學したのです、其事情は斯です、私の父は投機で失敗して家計が豐ではありませんから、學校を止して實業をやれと度々勸めますが、私はどうしても聞ない者だから、叔父がまあともかく遣れと

いつて今迄學資を貰いでくれてゐたのです、叔父といふのは中々苦勞人で米國で苦學して商業大學を卒業し歸朝して正金銀行へ入つて可なりの地位を占めてゐましたが本店の命令で紐育の支店へ出張を命ぜられて渡航し又私の父は郷里へ歸て了ひ、私一人東京に殘りました、丁度此時分豫備門の試驗に及第したのです、此の事を國元の父に知らすと非常に父が怒りまして、何時迄叔父の扶助を受る積か斷然獨立して實業界に入れと云つて來ましたから、私もグット癪に障つて誰にも最う世話にはならないと決心して何か自活の道を立てゝ素志を貫かうと考へ專攻の目的も始は文學に有のですが、後には理學に變じてどうかして、理科大學を卒業したいと思ひましたが根が懐育で苦勞をした事が有ませんから、忽ち困却し無論豫備門は退學してボンヤリして居ますと、明治廿四年私の廿三の時、淺草烏越の中村座で川上一座

が始めて壯士芝居の旗上げ興行をやつたのです、芝居は以前から大好ですから私は早速見に行きました狂言は『板垣伯遭難實記』といふんです、觀てゐて私は「あの位の事なら俺でもやれる、寧そ此中へ入つて金儲をして一年程稼いで其金で學問をしやうか」と不圖考へてそれから四五日大煩悶の末、思案の臍を極めて川上の處へ俳優志望の書面を送つた處が返事がありませんから、其一座の青柳捨三郎の處へ出掛けて熱心に頼みました、それ程熱心なら入れて上げやうといふんで、とう〳〵私は俳優の卵となりました、此青柳は今、東北地方で演じてゐるさうです、只今私の手許に殘つて居ます罫紙五枚綴の『座員規約書』と題した書類は丁度此ときに書たものです大變六ケ敷い文句「故なくして女子の招聘に應ずる事を禁ず」とか何とか書いてあつて夫から座員自筆の署名があります、座長の川上、次いで筆頭には青柳、

岩田(亡)金泉、藤澤、中川、山盛、(亡)松谷、森、靜間、これから一人抜けて岩崎、(後に岩尾慶三郎と改む今は故人となれり)其の最後に私の名(小織桂一郎)がのつてゐます、私は青柳の世話で山盛德三の門下となりました、サテ芝居道へ入つて見ますと、中々外から見てゐた樣な事はなくウンザリしました、初め一年間は無給料で飯丈け喰はせて貰ふのが關の山です、此頃の新劇は實に苛いもので『でムる』式の全く舊劇臭い連中計しでしたが毎回滿員、分合興行です私は國元及び叔父とは一切音信不通で一年餘りゐる中に叔父は米國から歸朝しました、其時止せば可いのに滅多に叔父は今の身の上を知るまいと油斷して、横濱へ出かけて行つて叔父に面會を求めますと、二時間も待されて銀行が引ると共に叔父は出て來て、これから東京へ行くから貴樣も來いと、汽車で東京へ行つて一二軒用達して、又私を連て横濱へ戻

り伊勢山の新松旅館、(其頃の叔父の下宿)へ私を引張つて行つて主人に「どうか此男を預かつといて下さい、何處へも出して下さるな」といつて別室へ私を入れて仕舞ひました、初めから「久振」りとも何ともいはず默つてゐますから私はどうも變だと思つてる中にこのやうな始末ですから「しまつた、コリヤ叔父が何んでも知つてゐて自分を逃さぬやうに捉まへてるんだな」と氣付きましたけれど何うにも仕方が有ませんから十日計し此宿にごろ〳〵して居ました、其間に叔父は國元の私の父と文通して私の身の上について相談してゐたものらしいのです、十日目に私を呼び出して何も云はず「よく考へて見ろ」といつて又一月餘り監禁されて居ました、其中に私は一部始終を話ますと叔父は、それなら何故紐育の方へ云つてよこさぬ大學豫備門迄及第してゐて止したのは殘念な事をした、然し悔んでも返らぬとだから銀行へ入れとすゝめて、私に數學の一問題を出してやつて見ろと命じました、この問題は外國貨幣の換算で何でも無んですが、ポンドだとか、シリングとか外國貨幣の符號がついてをりましたから私には目馴れず判らぬ處から誤まつた答案を出しますと叔父は大に怒つて「斯な算術が出來ぬ者が、大學豫備門の試驗に及第ができるか貴樣は嘘をいふ」と大變なお目玉です、私は始めから銀行家志望ぢやありませんから止した方が結構だと思つて別に辯解もせずに默つてました、叔父はそれなら貴樣の經驗のある工學の方で鑛山事業でもやつたらどうかとすゝめました、一寸申し遣しましたが私が諸方の學校を飛廻つてゐます間に父が實業々々と八釜敷いひますから夜は築地小田原町の工手學校へ通學して一年半で採鑛冶金科を卒業して置た事が有ます私は彼處の第一回卒業生なのです、此經歷が有ますから叔父がさう云ふのです

此時叔父は直ぐ上海へ出張する都合になつてましたから一層嘘を吐て切抜やうと思つて丁度私の友人が伊豫の別子銅山にゐますから夫を頼て仰の通り鑛山事業をやりませう、と云ふと叔父は喜んで多分の旅費をくれました、それから叔父の出發を見送つて出掛けやうとしますと叔父がチャント頼んで置いたものと見えて新松旅館の亭主が是非私を停車場迄送つて行かうと云つて聞きませんから同伴して新橋へ行きともかく途中から引返すにしても此主人を欺く手段として京都迄の切符を買ひ汽車に乘つて主人と別れてから何處かで下車して、東京へ引返さうかと考へてますと隣席の客同士が向ふから來る汽車は大船の次の驛でこの汽車と出逢ふんだといふ話を聞きましたから其驛で私は下車して向からの汽車を待つてますと一向來ませんやう〳〵來たかと思ふと急行で通過して仕舞ひました、丁度此汽車は終列車でもう後

にない、近邊に宿を探しても小驛だから十五町程先きの山の口迄行かぬと無い其山の口の宿も木賃同樣のお粗末なので行かうにも人力車もありません、仕方なしに十貫目程の行李を擔いで田圃道をテク〳〵歩行、時候は九月頃で殘暑が嚴しく足は疲れる汗は流れるつく〳〵親の罰といふことを感じました、漸くの事で宿にありついて一泊し、翌日東京へ引返して目指す處は淺草公園の吾妻座、爰で川上が洋行中の留守に藤澤が座長で、再興川上座といふ標榜でいよ〳〵明日蓋を明やうとする前夜近所がスッカリ火事で燒けたので芝居は遠慮休み、役者の宿所もしかと判然ぜぬといふ有樣、少しへコ垂れましたが諸方を探して藤澤に會ひ事情を打明けて頼みますと「夫れ程熱心なら大にやり玉へ」と承諾してくれてそれから諸方の興行に出勤する事になつたのが、私が今日の位置を作る階子段でした。

尾上菊五郎（舞伎優）

僕が始めて踊を敎はつたのが五ツの年で、お師匠さんは植木店の藤間およしさんでした、手ほどきに「とんび奴」を敎つたのですが、其時分には踊が大嫌ひでよく途中で遊んで了つて、稽古をしたつもりで歸つた事がありました、其時代には新富町の僕の家から、植木店までの車賃が往復十錢で行かれたもので、稽古の出掛にお母から十錢の車賃を貰つて出るのが規則になつて居たのですが、初めのうちは附添の弟子と二人で二人乘へ乘つて通ひましたけれど、中程から車に乘る事をやめて、其五錢で、おもちを買乍ら歩いたんです、買ふものはいろ〳〵ありましたが、先づ紙の風船、評判の玉や〳〵、見るものでは飴やのお菊のおばけ、ホニホロなんぞで

した、そんな事をして道草を喰ひ乍ら、弟子と二人で遊んで家へ歸るとすぐに、着物を着替へて、又お母から五錢のお小遣ひを貰ふのがお極りで、それを持つとすぐ飛出して了つて、晝飯は龜井橋通りの屋臺店の串へさゝつた蜜の付いた食パンを三錢買つて食べて、殘りの二錢で一杯五厘のアイスクリームなんか飲んで、遊んで居たので、家へ歸つて來るのが夜の十一時頃ですから、踊をさらふ隙もなにもありやしません、又さらへと云はれた所で、家へ歸ればすぐ、逐電して了ふのですから、滅多にさらつた事なんかありませんでした、しかし踊の稽古は、植木店の外に西川巳之助さんと田町の花柳壽輔さんと、花柳勝次郎さんに就て敎はりました。

四人の師匠のうちでは、田町の壽輔さんが一番やかましかつたんです、やかましい所ぢやない、怖かつた位でして、出來ない所があると扇でぶたれるので、扇の跡

が付いた事がありましたよ、其時分にはまだ鐵道馬車のあつた頃でしたが、僕は家から車で稽古に通つて居たのですけれど、淺草の通りに鬼が鼻緒を引張つて居る下駄屋の看板のある所まで來ると、踊の事を考へて胸がドキ〳〵して來ると、其うちに師匠の所へ曲る角に魚やがあつて、其葭簀を見ると足が震へて來た位にイヤでしたが毎日〳〵出勤の帳面を持つて行つて、それへ判を捺して貰つて來るんですから、ずる休みをする譯には行かないで困つて了ひました、さうして踊がうまく出來ないと、師匠が大きな聲を出して、車を返して了へ、十日も泊めてやると、怒られる事なんぞがあつて、さう云ふ時には實にウンザリとして了ひます、しかしそれだけに覺える方でも一生懸命でしたから、夢中乍らに一遍通して、やつて呉れば、大概は覺えた方でしたがいろ〳〵稽古をして居る間に、僕が十二三の時代には、お師

匠さんは少し、もうろくの氣味で小傳次さんに教へた踊を僕に踊らせられたのには驚きましたよ、それで知りませんと云つても、何でも教へたに違ひないと云んだからしかたがありません、勿論三人で一緒に立つたのでしたけれども、とう〳〵知らない踊をごまかして踊つて了つたら、師匠も跡で氣が付て「お前はごまかすのがうまい」と言はれた事がありました。

又花柳の勝さんが家へ出稽古に來て下すつた時分に、僕が『王兎』を習つて居たので素裸になつて踊らせられて居るうち、お師匠さんがうしろを向いてお茶をのんで居た間にそこにあつた唐饅頭を、踊乍ら一つ口へ頬張つた所が、それを見付かつてなぐられたのです、けれど隠さうと思つても裸だから入れる所のないのに弱つて了つた事を覺えて居ます。

其のち築地の團十郎に踊を敎へて貰ふやうになつたのは、僕が十四の時で、歌舞伎座でお三輪を勤めるに就て敎つたのが初めでした、團十郎の敎へ方も隨分やかましい方でしたが、同じやかましいのでも花柳の師匠のとはやかましさが違つて居ました、第一番にお三輪を敎つた時には、團十郎がすつかり裸になつて踊つて見せて下すつて、脊中の曲げ方から足の折り方までやつて見せて呉れました、其次が『紅葉狩』の山の神茅ケ崎の別莊へ行つてからは『子寶』を初めとして、いろ〳〵の物を敎へて貰ひましたが、前後六年間稽古の仕通しと云つてい、位です、さうして一日に二度づゝやらせられたのだから、隨分情なくなつた事もありました、けれど僕が今日踊の出來るのは、全く多く團十郎のお蔭なのですから、芝居へ出て來る時には團十郎の肖像と亡父の肖像を拜んで居るので、御命日には缺かさずにお供物を備へ

て、香花を絶やさないで、恩を忘れないやうにして居ます。

しかし茅ケ崎の團十郎の別莊に居る間には、隨分つらい事がありました、まづ其あらましを言つて見ると、毎朝六時に起きるのです、家に居れば中々寢坊をする方ですけれど茅ケ崎に居るうちは、團十郎が怖かつたので、朝咳拂ひを聞くとすぐに目がさめて起きて了つたのです、それから團十郎は顏を洗ふ前に庭を運動して、挿花にする花を切りに行くので、僕と榮造(今の榮三郎)が跡から付て行くと、團十郎は自分の氣に入つた花を見付けては僕たちに顎で指圖をするので、僕たちがその花を根元から切つて持て來るのです、それも初めのうちは花のそばから切つて叱られたので、段々根元から切る事を覺えたやうな始末なんです、それを持つて座敷へ歸つて團十郎が顏を洗つて來て、皆んな一緒に朝の御飯を食べるのですが、茅ケ崎に

居るうちは、食べるより外に樂しみがなかつたので、いつでも五六杯づゝ喰ひましたし、さうして是が實に旨まかつたのです、夫から御飯を了ふと掛物を掛替へるので知らず〳〵掛物の掛方も覺えました、それで掛物がお了ひになると、今度は庭から取つて來た花を持出して生るのです、僕たちには面白くも何とも思はなかつたけれ共、しかたがないから矢張、傍に坐つて見て居るんです、花を生て了ふと三十分の間墨をするのが一ト役です、其墨がすり上ると、毎日〳〵半紙を三帖づゝ手習をするので、それが僕と榮造と机を並らべて坐つて居るから、時々話をすると大變に叱られて、たとへ「榮ちやん」と一ト言口を利いても一帖づゝ半紙が殖へるので、それがつらさに三帖の手習を無言の業でつとめましたが終ひには三帖の半紙を三十分で習つて了つた事もありましたお手本は「天地玄黄」てエ奴で、其讀方を敎へて貰つて

折手本を廣げておさらひをした圖なんかは今考へて見ると全然豐川樣の坊さんがお經を讀む形ちでしたね、手習ひが濟むと午飯になつて、食後一時間だけは休ませて呉れるのですから、其間だけが僕たちの命なので、庭へ出て蟬を取つたり、縞蛇を取つたりして遊んで居るとガラン〳〵と鈴が鳴るので、それを合圖に座敷へ歸ると、それから踊の稽古に取掛るのです、地彈きは圓十郎の妹のおひろさんと云ふ人でした、さうして圓十郎の踊の敎へ方は、最初一ト通り初めから終まで踊つて見せるのです、それを弟子の升藏さんが見て覺えて、二度目からは升藏さんが立つのを見てやるのです、初めのうちは決して小言を言はないで、どんな長い物でも四ツ位に切つて覺えさせて了つて、それを又圓十郎が見て居て形ちを直して拵へ上げると云ふやり方でした、しかし升藏さんが時に依つて所々忘れるので度々叱られるの

がおかしいと思つて居ました、踊の稽古の時には、二人の娘も立つて一緒に稽古をするのですが、是が毎日三時間半位掛るのです、それでミッシリとやるんです、勿論夏の事でしたけれど、『子寶』を一つ踊るのは、汗びつしよりになつて、浴衣を五枚取替へた事がありましたが、實際それ位に骨が折れたんです、さうすると或時踊の稽古の最中に、大きな雷が鳴り初めたので、雷嫌ひの團十郎は、大急ぎで蚊帳の中へ駈け込んで了つたので、ヤレ嬉しや今日は稽古が助かつたと思つた位でした、それで團十郎と云ふ人は、何事によらず叱る時には必ず差向ひになつて、シミ〳〵のんどりと云はれるので、どうしても感じなければならない事になるのです、叱つて了つた跡では「今のは小言だよ、是れで小言はおしまいだよ」と云つて、改めて「サア是から何でも好きな事をしてお遊び、ソラ爰にお菓子があるからおたべ、羊羹

を取つてやらう」と云ふやうに優さしく言はれるから、つく〳〵感じて了つて我知らず涙がこぼれて、アヽ悪い事をしたなと後悔をさせるやうになるのです。

中村吉右衛門

（喜俳優）

私の子供時分の話は、是まで新聞や雜誌に度々出て居りますのでもう皆さんのお耳……イヤお目に蛸が入つて居る位だらうと存じます、しかし折角のお尋ですからそれではざつとお話致しませう、私は元來役者が大嫌ひであつたので、少さい時の考へでは、お醫者樣か畫師になりたいと思つて居りました、其うちにも畫の方が大好きで、成べくは畫師になつて見たいと云ふつもりで、松本楓湖先生のお弟子になりまして及ばず乍らも畫筆を持つた事もありましたので、今日でも旅行中などは畫の具をかきまはす事を樂しみにして居ります、そんなやうな次第で人樣のお書きになりました畫は、古い物でも新らしいものでも、それを拜見する事が何よりの樂し

みなのです、從つて畫をお畫きになる方とお心安くいたして居りますが、段々畫の講釋を伺つて見ますと、俳優の藝も畫の道と少しも違ひませんので、先生方のお話を伺つて居りますのが、知らず〳〵自分の學問になりまして、大變な德を得る事が御座います。

幼少の頃には、前にも申しました通り役者が大嫌ひで、亡くなつた松島屋さんが、「辰坊い、物を買つてやるから舞臺へ出ないか」と言つて下さると、私が「い、物はいらない」と云つて斷りましたのです、又宅へ參ります者などが、私に役者になれと云つてす、めるやうな事がありますと、「いや〳〵」と云つて泣きました事を覺えて居りますが、どう云ふ譯で嫌だつたかと云ひますと、自分にもよくは分りませんけれども、其時代には、人樣がいらつして、「オイ辰坊や」と呼ばれると、何だか極り

の惡いやうな氣がして返事もしないで、壁の方を向いて了つた位でしたから今考へて見ると人見知りをして、はにかみやだつたのだらうと思ひます、從つて役者じみた事が大嫌ひで、……今でも嫌ひですが……、役者の家に生れ乍ら、芝居は多く見ませんし、又芝居の眞似一つした事がなかつた位です。

それが、明治廿九年に私が十一の年で、親父が横濱の蔦座へ出て居りました時に、始めて黑布を着て舞臺へ後見に出て見たのです、それも舞臺へ出たいと思つて出たのではなく、皆んなにすゝめられて、子供心に遊び半分、氣まぐれで舞臺の邪魔に出た位なものですから、無論毎日缺かさずに出て用をすると云ふのではなく、只氣に向いた日には黑布を着て、舞臺をキョロ〳〵歩いて居るのです、しかし親たちは私が遊び乍らでも舞臺へ出るやうになつたのを喜んで、成べく多く舞臺へ出すやう

にして居たので御座いませう、私も其うちに段々と舞臺慣れて來て、御見物を見ても何んとも思はないやうになつて來たのです、其時分に今の曾我の家十郎が私共の弟子で中村時代と云つて居まして、始終私の守をして居て呉れましたが、時代は中二階の人で腰元などに出て居たのですが、其頃から作の心得があつて、『嫗山姥』の太田の十郎でも出ると、其俳優から時代に『盡し』の白を頼んで居た事などを覺えて居ります、そんなやうな譯で、時代は私のお傍去らずでしたから、私が舞臺へ後見に出るに就ても、後見の後見と云ふ格で、よく面倒を見て呉れました、さうして矢張私を舞臺へ出したいと思ふ一人なのでしたから、親どもと一緒になつて、絶えず私を舞臺へ出す樣に〳〵として居りましたので、私も初めは舞臺へ出てもオド〳〵するやうな、心持がしましたが、けれども慣れるに從つてなんでも無いやうな氣にな

りまして、或時に「役者をして見やうか」と云ひますと、親たちは大變に喜こびまして、此機を取外しては大變だと云ふやうな意氣で、それから舞臺へ出る話になりまして、翌三十年の三月に、十二歳の初舞臺で二長町の市村座へ出勤したので御座います、其時に藝名を付けますに就て、親父の俳名が獅童と申しますから、獅々松がよからうなどゝ云ふ話もありましたのを、親父の家内の父親の名の吉右衛門をそつくり私の藝名に名乘る事になつて出勤いたしたので、其時の芝居が越後騒動で、三河屋さん……今の團藏さんの大久保で、親父が彌十郎を勤めまして、訥子さん、芝鶴さん、源之助さんなどゝ云ふ顔觸れで、私は若殿樣を勤めました、其のち淺草座……今の國華座で、子供芝居を興行いたします事になりまして、團藏さんと、訥子さんと、家の親父の三名で口上看板を出しましたが、其時の一座が小傳次、茂茂太

郎、私などで、其時の私は、鳥居前の忠信を勤めましたので、花柳の勝次郎さんがお師匠番になつて下すつて、やかましく言はれて稽古をいたしましたいけに、御見物からお聲が掛るやうな譯でしたから、子供心にも嬉しいやうな氣がいたしましたが、それから其子供役者の一座が、新富座へ行く事になりまして、小傳次、宗之助、又五郎などの一座で引續いて興行をいたして、丁度私が十六七歳の時分まで打續けましたが、其のち歌舞伎座へ出勤して、車引の松王と寺子やの松王を勤めましたのが、井上さんの見出しに預りました始めで、それからはずつと歌舞伎座附になりまして、外の芝居へは出ませんでした、勿論歌舞伎座の人になりましてから、其間に市村座へ參りまして、伊賀越の内記、鎌腹の彌五郎などを勤めた事が御座いましたがそれは、歌舞伎座の人として出て居りましたのです、其後卅八年に歌舞伎座で名

題になりました時、石切梶原を勤めまして、引續いて今日まで十一年間歌舞伎座附で、外の手の芝居へは出た事が御座いませんのです。

しかし前にも申しました通り、私は中年からの役者なので、殊に子供芝居で無理な役をして參りましたのですから、うと〻樣いのう、か〻樣いのう」と云ふ順序から仕上げていらしつた方には及びませんので、今になつて考へますと、早くから俳優にならなかつた事を殘念に思つて居ります、勿論子供芝居時分には、分に過ぎた大役も勤めましたのですが、柄に無いぢいばゝあを無理に演るので、聲は太くなりますし、さうしてそれが癖になつて老けるのが得意になるやうな事がありまして、肝腎の自分の年頃の役をする時の邪魔になるやうな理で、子供芝居と云ふものは踊りものならば差閊はないのですが、其外は一寸考へますと大變に藥になるやうに思

はれて、其實は却て毒になるもので御座いますから、弟の米吉などは子供芝居へ出さないやうに心掛けて居ります。

右のやうな次第で、私は中年からの役者で御座いますから、十二の年に初舞臺へ出る事になりました時に、初めて踊の稽古に行くと云ふやうな譯で、多くの藝事の中でも踊だけは、五つ六つ位から身體を慣らさなければならないものですけれど、私のは十二の年から初めましたのですから、思ふやうな事が出來ませんで御座います、けれども宅の母が五つ位の時分から世話になつて居ります緣で、花柳勝次郎さんの所へ稽古に參るやうになりまして、師匠も骨を折つて敎へて下さいますから私も出來るだけ一生懸命に覺えますつもりで稽古をいたしましたし、又只今でも役の事に就て始終敎へて貰ひに參るので御座います、其外の稽古事は、下方が望月、義

太夫が野澤悟助、三味線は彌十郎の甥の彌吉と云ふ人に手ほどきをして貰ひましたが、跡は自己流でかきまはして居ります、河東節は山彦さんに習ひましたし、此頃では一中節を高橋の隱居さんに敎つて居りますが、此隱居は以前都一すがと云つた方で今では商賣にしては、居られませんのを、特別にお賴み申して稽古をして居ります、しかし親父などは五つ六つの頃から稽古事を初めまして、今日で五十年も舞臺へ出て居りますのですが、私のは何を申すにも中年からの事で御座いますから取別けて勉强をいたしませんければなりませんのです。

子供芝居時分には隨分むづかしい、役ばかりをいたしましたが、それが今になつて役に立つと云ふやうに、思はれません、それと申しますのが、其時分には只敎はつた通りの形ちだけを覺えて演じましたいけで、役の精神と云ふやうな點に氣が入

つて居りませんのでしたから、どんなむづかしい役でも、それ程むづかしいとは思ひませんので、言はゞ只夢中に勤めて了つたので御座いますから、今日再び其役を勤めましても、全然新規に勤めるのと同じ事なのです、又私が歌舞伎座へ出勤いたすやうになりましてからは、たとへ役はいたしませんでも、始終名人の團十郎さん菊五郎さんの傍に居りましたので、それが大變な藥になりました殊に菊五郎さんは私が子供芝居へ出て居ります、時分からいろ〳〵とやかましく言つて下さいました手を取つて丁寧に敎へて下すつたのです、又團十郎さんは、私を御自分の手元に置て一かどの役者にしてやると仰有つて下すつたのでしたけれど、そろ〳〵何か言つて戴くやうな役をする時分に死なれて了ひましたので實に殘念に存じて居ります、しかし私も物心付きましてからは役者になつた以上は、旨くなりたいと思ひまして

隙さへあれば人様のお芝居も拜見いたしますし、又先輩の方々のお話にも耳を傾けて居りますし、宅に居ります時には、親父にいろ〳〵昔話を聞く事などを樂しみにいたして居りますが、扨自分が舞臺へ出て見ますと、思つた事の半分も出來ませんので、どうしたらうまく出來るのだらう、どうかしてうまくなりたいと云ふ事許り考へて居ります、それに時代物などの出ます時には、一應親父に昔の型を敎はりまして、又歌舞伎座の先輩の方にも敎へて載きまして、それを折衷して及ばず乍らも工夫を付けますのですけれども、舞臺へ出ますと、何しても思ふ通りに參りませんし、又どんな役にいたしましても、一から十までむづかしいので、此役は爰と爰がむづかしいと云ふやうに、別段にむづかしい場所は見出しませんかはりに、殘らずむづかしいので、自分だけには油斷なく勤めて居りますつもりで御座いますが、

何分にも至らぬ勝で、定めしお目まだるい事と存じまして恥かしく、思つて居ります、前にも一寸申しました、通り、俳優の藝と藝の道とは、丁度同じ事で、時々畫の先生方のお話を伺ふのを、自分の事にして服膺いたして居りますつもりで御座いますが、何を申しますにも修行中の事ですから、どうか何分ともに惡い所はお指圖をお願ひ申します。

喜多村綠郎

（新俳優）

僕が大阪に居た頃、家内を迎へて初めて家庭を作る事になつて、早速家を探させました、そこで家内は宅の車夫を連れて毎日〳〵諸々方々と恰好な家を搜して歩いた、この車夫と云ふのが元は神戸の外國館に居た者でイングリッシュに精通した學者であつて、能く僕の氣性を飲込んで居る男でした、所が或日の事車夫が歸つて來て、先生の理想の家を探し當てゝ參りましたと言ふのです、夫はどの邊だと聞と所は東區大阪城の邊りで兩替町と云ふ高臺で、表掛りは高塀で圍ひ、庭も廣く座敷も大きく、二階の書齋からは朧氣ながら心齋橋通りも見えて眺めも頗よろしいとの事、只一つ氣になるのは表二階の四疊半の眞鬼門の壁の下に窓が切つてある事と

裏鬼門に三尺の開き戸があつてそれに豐川樣の魔除けのお札が張つてある事ですと云ふのです、そんなことはどうでも話の樣子では、大分よさそうに思はれるから、兎も角も行つて見やうと言つて出掛けて見ると、成程車夫の云つた通り立派な家で南側の北向きになつて居る間口は六間位もあるでせう、先づ門を入ると一寸した庭掛りに成つて居て突當りの荒い大阪格子を明けて入ると、西へ向つて四疊半の玄關があつて棟の見えて居る作りです、中仕切りの細かい大阪格子を明けて入ると、右手が出窓のある所で左は襖になつて居ます、又それへ入ると四疊半の佛間で右手に寂びた小庭が取つてある、そこを又南へ入ると本間の十疊敷で、疊は白い緣を取つた厚さ三寸位の床であつて、是はお城の疊か本願寺の疊であらうと云ふ事でした、座敷の造りは本なげし附の書院建で、西側に三尺の押入地袋附の本床並びに書院窓

東は壁に成つて居て北の隅のかとう口は臺所の方から來られる樣に出來て居る、前はすべて椽側に成つて居て一と抱へもある樣な石の手水鉢は地面を堀下げて底から生へて居る樣に見え、高塀で取圍んだ廣庭は鍵の手に曲つて其通りの椽縁きは四疊半の前を通り抜けて、便所への通ひ路となつて、其先が湯殿と云ふ構へ方、又二階へ上つて見れば成程表二階の四疊半に四方を釘附に仕た上に錠前まで下ろした三尺の切戸があつて其眞ん中に魔除けのお札の張つてあるのは一寸おかしいから早速お隣家からヤツトコを借りて來て、住むべき主人が手を掛けるに仔細は無い道理ですから、車夫と共々力を合せて明けて見れば、別段に朦朧と烟りの立上るわけでもなく、只大きな五寸釘が出た位の事で格別の異狀は無かつた、併し此五寸釘を見た時には、何か此戸を今日まで、開かないに就ては、不思議な意味がありさうには思は

れました、此四疊半が下座敷の四疊半の上になつて居るので、それまで明かずの切戸になつて居た、中は一面に菰が敷詰てあつて是は下が十疊の上に成つて居て釣天井であると云ふ事でした、そんな事はとにかく、頗此家が僕の意に適つたので家賃は何程であるかと聞て見ると、一ケ月金廿五圓だと云ふのです、決して高いとは思はなかつたけれど、道頓堀まで行くには坂一つ越えると云ふ所だから其位なものであらうと思つて取極る事に仕ました、尙此家を周旋して呉れた人の語る所を聞いて見ると、ツイ此間までは圍物が住んで居たとの事で、障子はすべて新らしく張替られてあつたが、庭を見ると雜草が二尺程も高く生へ延びて居る、勿論初夏の候ではあつたのですが、十五日計り前まで人の住つて居たに仕ては、餘りかまわな過ぎる樣にも思はれたから其譯を尋ねて見たら、是は先の人が不性であつたのだと云ふ返

事でしたさうして障子の紙の新らしいのに對して、此の雜草の繁つて居るのと、葛の唐紙が一と方ならず古びて、居るのが二階の四疊半よりも却て意味がある樣に思はれました、しかし元々氣に入つて居るのではあるし自分の家と收極めた以上は我物ですから早速に庭師も入れ經師屋も呼んで總ての手入を仕ましたので、見違へる樣ないゝ家に成つて、尋ねて來る人は誰も彼も賞めて行かない人はありませんでしたゝ殊に風吹がよく通して家に居れば夏を忘れる位の涼しさでしたから、もう魔除けのお札や五寸釘の事などはすつかり忘れて仕舞つて喜んで暮らして居たのですが、間もなく意外も意外驚くべき怪事が起りました。

其時家に居た書生が岡本、高岡と云ふ二人と、外に例の英語の達者な車夫と三人で、其うち岡本と車夫の二人を表二階の四疊半へ寐かし、高岡は下の四疊半へ寢る

事になつて當座は何事も有ませんでした、其内に追々暑く成て來ましたから、夏の建具を新らしく買整へそれを立てゝ、冬の物の方は仕舞ふ事にして置場が無い所から、例のお札の張てある釣天井の明かずの間へ入れました、忘もしません其時に朝日座で泉鏡花子の『七本櫻』を芝居に演るに就て、色々な化物の出る狂言ですから、其工夫を仕ながら、家内と二人で樣々な化物語を仕て居ると、臺所の方で書生や車夫の聲で矢張化物の樣な話を仕て居るのが聞えてどうしても、今夜は二階では寐れないと言て居る事です、何を言つて居る事かと思つて仔細を聞て見ると、實は先生昨晩大變な事が御座いましたと言ふのです、何な事があつたか話して見ろと云ひますと岡本と車夫は眞面目になつて昨晩は雨がしよぼ〳〵降つて蒸し暑いので、二人共に寐苦しかつたので眠りませんでした、さうすると一時を聞て少し經つと屋の棟で

烏が三聲跡を引て長く鳴きました、夜中に烏が鳴くなんて變な事が有る者だと思ひながらフト見ると、例のお札の張つてある切戸の下の所へ陰火が一ッ燃え上つたのです、見て居るうちに此火が段々と上へ上つて錠前の所まで行くとパッと消えて仕舞ひました、さうすると又下の方へ一ッ燃え上つて同じ樣に錠前の所まで行つて消えましたのを、二人共慥に見屆けました、實に不思議で氣味が惡くつて、迚もあすこの座敷へはもう寐られませんと云ふ訴なのです、併し僕はそれを信じません、いろ〳〵考へて見るのに夏の事ですから窓はいづれも明放しに仕てあつたのに、次ぎの四疊半には不用な額面や硝子を掛けた寫眞の額などが置てあつたりする、そこへ表の點燈でも差込んで居たもので、あかりの映じて居る硝子入の額などが風の爲に動きでも仕たのが、お前達の寐て居る枕元の拭込だ戸に寫つて動い

たのであらう、あの座敷に何事かあるのだらう〳〵と思つて居る所へ、今言つた樣な事があつたのでそれが陰火に見えたのに違ひない、お前方の神經の故に違ひないが假りに是を狐狸の仕業と仕て見たらば、飯でも放り込んで置てやれば、いゝではないか、と云つて僕は一向に取合はなかつたのです、それがと云ふのに爰の家から芝居へ行くには道も小一里程ある事ですから、或は魔除け札を利用して間接に此家を引越さして、近い所へでも移らせ樣と云ふ計畫ではるまいかとも、疑つて居たからです、さうして矢張り右の二人は構はず二階の四疊半へ寐ろと云つて命じました其後四五日の間は何事の訴もありませんでしたが、僕が夜中に便所へ行く時に二階で大變に唸されて居る聲の仕たのは慥に聞きました、けれ共當人達には話さない方が良らうと思つて、態と默つて居ましたからそれは其儘に濟みましたが、扨明日は

芝居の初日と云ふ日になつて、又岡本と車夫の兩人が僕の前へ來て、いよ〳〵今晩からは二階へは寐られませんと云つて凋れて居ますから、又くだらない事を言ひ出したが一體どう仕たのだと聞きますと、車夫の云ふのには實は昨晩も寐苦しいのでいつまでも起て居りました、其うち岡本さんは寐て仕舞ひましたから、話相手はなし、仕方が御座いませんから本でも讀もふと思つて、枕元にある送迎の提灯を取つて蠟燭へ火を燈して、英詩の本を讀ながら一時を打つのを聞きましたが、やがての事に此間の晩の通り、鳥が三聲哀れに長く跡を引て鳴きましたから、ハテいやな聲だ氣味が惡いなと思つて居りますと突然と、それは〳〵大きな手が出て蠟燭を握みさうに仕て「火を呉れ」と言ひましたから、私はあぶないと思つて「いかん」と云つた儘吹消しました、さうするといづくともなくマッチを擦つて火の點たのが、幾本と

なく飛んで來ますから、いよ〳〵あぶないと思つて一生懸命にマチッを引たくつて裸の儘で逃げ出しました、さうすると背後から褌のみつを取つて引かれましたから、是は大變だと思つて、「何處へ連れて行く」と聞ましたら、「戸棚の方へ連れて行く」と言つて力に任せて引摺れました、私しも連れて行かれては大變だと思つてあり丈の力を出して逃ますと、それ迄慥に締つて居た障子が明て居ましたから、そこの柱へ捕まつて引かれる、引かれまいとする、爭ふはづみに私は次の間へ投げ出されましたので、夢中になつて下へ來て高岡さんに一部始終を話すと、高岡は日清の役で實戰に參加した男だけあつて、ちつとは度胸も据つて居ます所から、「よろしいおれが見て來てやる」と云つて呉れて、臺所から出刀庖丁を持つて來て燈を點けて二階を調らべて見ましたが、此時にはもう何物も見えませんでした、しかし兎に角

大變な事があつたには違ひないから、岡本を起して下へ連れて行うと思ひましたがよく寐込んで居て、どうしても起ませんでしたから是は其儘に仕て置て私は下へ來て高岡と一緒の床へ入つて寐かして貰ひました、さうすると程なく女の駒下駄の音が家の前で止りました、此夜更けに女の來る筈はないがと思つて居ると、二階に寐て居た岡本が何んとも言はれない嫌な高い聲を出して唸されました、是を聞きました時には私も高岡も頭から水を浴びせられた樣な心持がして、夜具を冠つて仕舞ひ再び二階へ見に行く勇氣は出ませんでした、さうすると又少し時を隔てゝ二階の窓の障子へ砂を打掛ける音がして、それが下の玄關の障子の所へ落ちて來る樣に聞へました、前夜のは二階許りでなく今お話を仕た通り方々に不思議な事があつて、然も二人まで慥な證人がありますのですから、どう仕ても今晩から二階へ寐る事だけ

は勘辨して戴きたいと云ふ訴です、成程聞て見れば一應は不思議の樣でもあるが、僕にはどうも、信ずる事が出來ないのです、最初車夫が本を讀んで居る時分に、突然蠟燭の所へ大きい手が出たと云ふのは、多分隣りに寢て居た岡本が寢ぼけて手でも出したのだらうと思ふのです、それから火の付たマッチが飛んで來たと云ふのも蠟燭が消えた所から岡本がマッチを擦つたのではなからうかと思ふのです、其他の事も戸惑したものか疑心暗鬼を生じると云つた樣な譯だらうと思はれました、それと云ふのが僕は臆病ですけれ共、自分が實地に出會して居ないのですから、どうも本當とは思はれなかつたので或晩の事内心はこわ〳〵ながら表二階の四疊半へ上つて三時間計り本を見て居た事がありましたが、其間には一向怪しい氣振りも無かつたです、所で僕は相變らず芝居へ通つて居ましたが、車夫は化物に投げられたので

身體が痛んで堪らないと云ふ樣な次第で、芝居へ行つて樂屋内の者に、話した所から、忽ちの内に大評判となつて、騷ぎがいよ〳〵大きくなつた、それを大阪新報の松崎天民君が聞込で、書てもいゝかとの相談でしたから、僕は信じては居ないが全然跡方の無い事でもない樣だから、書くのは一向差閊ないが書生や車夫の話は針小棒大の事なんだらうと思ふと云つて置いた所、七八日經つと大坂新報へ續き物となつて然も繪入にして掲載されました、其繪を見ると大きな毛むくちやらな手が蠟燭を取らうと仕て居る所や、又は時計が宙を飛んで居る所やらいろ〳〵の圖が出て居ますそれから、それを探り出して古い事やら新らしい事やら、近所の噂やら何やら彼やら、すべて大業に書立てゝ、家主の名までも掲げられましたので、家主は大變に恐惶を來たしてすぐと僕の所へ遣つて來て、家賃は減じてもいゝから永く住で居て

呉れと言ふ頼みです、僕は別段に恐しいとも怖いとも、思つて居るのでは無いから素より引越す最見も無ければ又此際家賃を直切る必要も認めない、實際騷ぎの方が大きくつて僕等夫婦には何の感じもない、或時は男は殘らず留守で家内と女中だけ殘つて居る事があつてもランプを消した風さへなく、何事も變つた事のあつためたしがない、寧ろ目の前へ現はれて呉れるなら却て面白からうなどゝ言つて力んで居ました。

靜間小次郎

（新俳優）

私の嗜好を申して見ますと動物では狆が一等好きです、何だか蟲の好く故か可愛くてなりませんよ、ッイ過般の事ですが或人から數十金で一匹の狆を讓り受け「勝太郎」と命名け寵愛して居りましたが、不圖傳染病に罹つたので直に獸醫の診察を乞ひ、八方手を盡しましたが、病勢日に募つて次第に衰弱し最早や生命は旦夕に迫つたんです、私は平素の通り芝居へ出勤して居りましたが氣が氣でなく、打出すと其足で急いで歸宅ります、と待ち兼ねたと言はぬ許りにいとしや苦しさを耐へ身を起し尾を振つて、私の膝に這ひ上り一聲の叫びを、此世の名殘りに息は絶へたのです、臨終の一聲が謝禮やら暇乞の意味なのでしやう、不愍で仕方がなくその夜はまんじ

りとも眠らないで恰度愛兒を死去つた人のやうに、終夜悲悼の翌日建仁寺境内に葬つて「勝太郎之墓」と云ふ墓標を建て菩提を弔つて遣りました、植物では梅に松位なものです、梅は萬木未だ氷雪に鎖されて眠れるのとき、まづ初春の魁として紅解き初て而もその花の冷艶なのと、香の馥郁なのは、恐らく比類が無らうかと、思ふんです、松は如何に霜雪に苦められてもその節操を變へないと云ふ忍耐力に惚れ込んだのです、時候は矢張り春ですな、什麼も長閑な春の日に花見小袖を身に輕く纏ひプラ〳〵と出掛けた心持ちは何とも言へません、或は俗だと仰有るお方も御座いましやうが兼好のやうな出家ですら「今一きは心も浮き立つものは春の景色にこそあんめり」と申して居るじやありませんか、況して俗人の私しに於てをやですハ、、、着類は和服が好きで洋服は嫌いです、だから平素樂屋へ出這入りするにも、其他

何處へ行くにも鹽無地の羽織にセルの袴を穿いて居ります、氣心地の良いのはお召ですが元來私は極地味な物が好きで自然と細かい柄を撰ぶのです、色素の内も、黑色を好みますから從つて衣服の色合も檳榔子とか鐵色とか黑ずんだものを多く用ひます、食物は野采類が大の好物でその他はあまり感服致しません、住居に對する好みは唯珍らしくさへあればそれで結構なので、折角手入をして這入つても、少しく馴れると直に飽きが來るので、又もや轉宅をすると云ふ騷ぎ、是が私の唯一の道樂です、左樣當地へ參りましてから十七回目ですが、今に又持病が起つて、ポッポッ捜探しに出掛けねばならぬがと思つて居るんですされば、良く言へば綺麗好きで悪く言へば一種の浮氣性なのでしやう?

家庭、イヤ別段取立てゝ申す程の事もムいませんが恁んな道樂稼業を仕て居つても家庭は隨分嚴重に遣つて居ます、從つて私は家庭に對する趣味を充分抱つて居りますので書物の内でも家庭小說を常に愛讀して居るやうな次第です、ハイ子供は九歲になる娘が一人ムいまして小學校へ通學つてゐます、將來女優に致す考へはムいません、何故生前石碑を長樂寺に建設したかと仰有るんですか、これには大に理由がムいまして、今日の俳優の内には往々立派な居宅を構へ、室内の裝飾に善美を盡くし驕奢に日を送つて居るのがあるやうですが、私は元來藝術家は其麼ものではなからうかと思ふんです、赤貧に甘じて己が技術を研鑽するのが本領で、居宅の如きに那の恁うのと數寄を好んで居るとツイ本職がお留守となり、殊に水草を逐ふて移轉する稼業柄ゆゑ假の宿に贅澤の構へは不經濟でもムいます、旣私は粗末な邸宅に住んで居りますが、却說考へて見ると恁うやつて、彼方此方と移り〳〵つてトバ

の結局何處で息を引取るんだか豫知ないから誠に心細い譯です、そこで私は心の慰安を得る爲めに彼の石碑を建設ましたのです、彼處の二坪七合五勺の地を自分の本宅と心得、假令此身は何時何處で果敢い最後を遂ぐる共、靜間小次郎の本宅は依然として東山の麓長樂寺の境内にある積りなのです、良い場所でしやう、イザ見にどんせの春の眺め、夏は青葉蔭れに時鳥、時雨の縞に紅葉夕禪の秋の夕、冬は洛中一面の銀世界を眼下に觀ると云ふ、所謂京都四季折々の風景を居乍らにして賞翫し得らるゝ譯です、序に目下石碑の傍に普請中の庵は本宅の番所で自分の邸宅を拵へる代りに二千五百有餘圓を投じて建設して居るんです、「時雨を厭ふ傘の濡れて紅葉の長樂寺」と云ふ句から「時雨庵」と名付けました。

お咄の序に私の性質を申しますと、私は至つて氣の短かい性で鳥渡した事にも腹

が立つて癇癪玉を投げ打つ、處が後で心を靜めて考へて見ると、左程の事でもなかつたに心付き、何だか癇癪玉の的に成た人が氣の毒な樣な感じがするから、金錢を呉れて遣つて慰めると云ふ始末で無益の費が重なるものですから、什麼かして此惡習慣を直さねばならぬと思ひ、自分で自分の心を和ぐる爲め、金神樣を信仰して居るんです、習慣で今一つ妙なのは、常に舞臺へ出る前に準備することが出來ないので、若し用意を爲ると他人の科が眼に移つて邪魔になり、白を間違へて困るんですそこで打棄て置て始終トヂますが、トヂると舞臺へ出て屹度旨く演れます、是は、全く不思議ですよ、夫によく白詞の記憶に困難する人があるやうですが私はお蔭で未だ白に苦心したことは厶いません、何時の間にやら覺えて登場すると、自然に口から出ると云ふ調子ですから實に氣樂で有り難い仕合せと存じて居ります。

得意の役ですか、目下恁う遣つて座長の位置に居る者ですから、勢ひ主人公の役に扮しますが私の得意の役は色敵です、彼の坪内博士の飜譯で廣津柳浪君の脚色された、『二た心』の「木暮利四郎」抔が最も適役と思ひます、夫から大阪朝日新聞では「靜間は塲當りが得意だ」と書かれるやうですが、これは同新聞社の渡邊霞亭君が嘗つて私を評して「塲當りの名人だ」と仰有つたからです、其故は芝居道では大向ふの人氣が最も大切でこれを失つたら到底一座を維持する事は出來ないので、私は舞臺上では絶へず大向ふを受ける樣專心注意をして演じて居るからです。

其の他私は社會主義で、自由平等を尊び、一度は藝術家の總理となつて劇界の覇權を掌握つてみたい希望を懷いて居るんです、理想の人物は平將門で私は彼れが覇氣が强固なるのに欣慕した譯です、彼は政治界を統一しやうと云ふ野心に駈られ

私は藝術界の統一を企圖てゝ居るんですが、その野心の性質に於ては大に異なる處が厶いますけれども、物騷な點に至つては同じで、或は私の末路も將門の最期と同じく、悲慘なる運命に葬られはせぬかと思ふと轉た寒心の情に堪へません。

中村芝翫（舊俳優）

女形の心得と云つた所で別段取立てゝ言ふ程の事もありません、併し初めの中は女に成終せ樣と云ふのが第一の苦心です、それには如何しても踊が入用です、踊の無い女形は形が固くつて肩が動きません、踊は如何しても、子役の中に體を拵へて仕舞ふに限ります、つまり女形となるに就ての體育上どうしても踊を知らなければなりません、俳優と踊留に女形許りでなく立役にも亦踊は必要てす、踊は體へ附てしまへば、拔けないもので、亡父の敎にも一ッの振りが本當に出來れば、外の物は何んでも出來ると云はれました、稽古は復習が肝心です、私も此復習をやかましく言はれた爲に十年の物は三年で仕上る事が出來たのです、殊に俳優の踊は藝者の踊

と違つて大きく踊らなければ見立が無いので、まともに踊る樣になる迄の苦しみは一ト通りではありません、又踊は腰が一番大事で、一寸手を出すにも腰が極つて力が入つて居ないでは本當の形は出ないのです、又ハンマに逆に踊るのもむづかしい物で、圓十郎は此皮肉な手をよく踊つた名人でした、私なども身體の惡い爲ではありますけれど、踊と云ふ事を知つて居るだけに、却てごまかし踊は踊れないのです又踊の中で右の手を出すにしても、表を見せる時には拇指の先を折つて人差指の方を反らす樣に上げて小指の方を下げて出せば細そりとした優しい手に見え、裏を見せる時は小指の方を反らす樣に上げて人差指の方を下げて見せれば、同じく細そりと見える樣で、或は寫眞を寫す場合にしても只手の形を優しくした丈ではいけません、平を見せずに角を見せる樣にすれば細く見えるので、是等は舞臺上にも必要な

心懸けです、又一寸泣くのでも姫や娘は、袖口の中で手を反らせた形に仕て、それを目の所へ持つて行くと色氣があります、同じ事でも内へ折ると色氣が無くなると云つた樣な譯で、些細な事ですが是等も矢張踊から出て居るのです、それに踊の無い人は第一に形が出ません、又暗挑などは形ち許りの物ですから、踊の無い人が演ると形に奪はれて仕舞つて其役になりませんが、踊のある人ですと、體は打捨つて置て其役になれるだけの違ひがあります、私共の目から見ると只立つて居る許りでも踊のあると無いとに直に分ります、野暮な役に扮しても、素人の役に扮しても、踊のある人の方が變化が仕好いので、それは詰り間を外して行くのですが、素人衆には此間とか息とか云ふことが一寸分りません、併し注進、物語、さはり抔は踊にならつてはいけないのです、取分けてさはりは極つて極らない樣にするのがうまいので

昔の名人は姫のさはりは袖での字さい書て居ればいゝと云つたさうで、つまり振りよりは思入が肝腎だと云ふ事です、それ故振附の附けたさはりは踊に入るので、寧ろ生野暮な位がいゝのです、夫から女形に扮する時には兩の臂を後へ引て貝殼骨と貝殼骨を付ける樣にすると、襟が拔けて撫で肩になつて細そりと見えます、其上女形の心得として、動作をするに成べく身體から臂を離さない樣にするのが、本當です、女形は腕や臂を見せるのは耻としてあるのですが、此頃では夫等の事を知らないで大分亂暴な事を演て居る人のあるのは誠に困ります、又女形の中でも八百屋お七とか油屋お染とかお三輪とか云ふ蓮葉な娘は、十三から五まで位の子供の心で演らなければ其役にはなりません、次に男を持つた女と持たない女との區別も一寸むづかしいので、男を知らない女形は始から終りまで耻かしいと云ふ事を性根に仕

て演るのです、顔は成べく上げない樣に伏目勝にして、それで心持には充分色氣が無ければいけません、たとへば自分の好いた男が傍に居る時などには、飛付きたい程顔が見たくつても、それを見る事は耻かしく、併し氣は充分に其男の方へ通つて居なければ人情は移りません、仕科の方は袖をいたづらする樣な事で總て內端に演るのです、又傾城となると是は賣物ですから、耻かしい素振が有てはいけません寧ろ得意になつて見て呉れろと云ふ氣で勸めるのです、又姫の役となると娘形と違つて重く演なければ其人になりません、三姫の中では金閣寺の雪姫が一番演り憎い樣に思ひます、なぜと云へば肝腎の働くべき兩手を縛められて仕舞ふので藝が出來ないのに、女形として足で鼠を畫くと云ふ亂暴な仕事があります、勿論此雪姫は浮世風呂に居た女ですから、姫と云ふよりも少し輕い心で演ますが、併し姫に成ない

ではいけないのでナカ〳〵難物です、さうして此役は引込みの「花岡山へ」の義太夫で入る所で刀を鏡に仕て女の嗜みを見せ元信に逢ひに行く心を利かせ、充分に女の性根を見せるむづかしい役です、次に鎌倉三代記の時姫も腹の要る役でナカ〳〵容易はありません、十種香の八重垣姫となると心が要らないだけに大變に樂な所があります、又女形の中でも役に依つては姫にしろ娘形にしろ人形見で見せる事もありますが、人形は一ッの體を三人で遣ふ物で、役者が其眞似をするのは、生きて居る者が死物の眞似をする事になるのです、其上人形見をする時には人形の惡い癖だけを取つて演じなければ人形には見えません、昔の活動を眼目と仕た時代はいざ知らず、一役の性根を顯はすと云ふ今日の時代には甚だ不向きです、しかし若い人などは其塲の持切れない爲に殊更に人形見で演る人もあります、けれど私は在來人形見で

演る物も全廢して拙ないながら人形でなく演じる事に仕て來ました、又女形のうちでは政岡などが最もむづかしいので、長帳場の間に飯焚き、千松の殺される所、榮御前見送りと云ふ三ツの峠があるのでナカ〳〵難物です、併し見物の方から聲の掛る「でかしやつた〳〵」へ來れば動きだけの事ですから腹は樂になります、私は長年女形で仕上げて來た身體ですから姫や娘を演て居れば樂です、演る人が樂な物は必ず面白く見えて賞められますが、自分がいろ〳〵苦心を仕て骨を折つて演る物は、却て面白く見えないで評判が惡いのは、つまり其藝が枯れないからです、それ故同じ扇や小萩を演ても、若い時分のは必ず荒かつたに相違ありません、今日の小萩の方が屹度柔らかになつて居ませうと思ひます、是は何役に限らず必ず夫丈の違ひはありませう、又娘許り演た跡で子持の役は骨の折れるものです、初めて子役を遣ふ

時には非常な苦しみで汗をかきます、夫と云ふのも子役を生かして、遣いたいと思ふからで、又其子役が迚も自分の思ふ通りにはなりません、つまり子役と息が合はないのを遣ふ方が合せて行くので、親が人情を運んでやらなければ子役は引立ちません、子役を遣ふ狂言は其子役がうまく見えて見物を泣かせる樣であつたならば、それは子役を遣ふ役者の腕のいゝのです、さうして子役は餘り小手の利く者よりは一層おつとりと仕た者の方が遣ひゝのです、次ぎに自分より年上の役と賤しい役などは私の柄では甚だむづかしい、年上の役又は名大將などの役は其の心持が竊ひ切れないからです、見物を泣かせ樣と思ふ時には、役の人物に成り切るのも必用ですが、舞臺では藏で泣かせるのです、先代の芝翫と云ふ人は、陣屋の熊谷を仕て居ても、其熊谷と云ふ人の何者であると云ふ事などはちつとも、知らなかつた人です

けれど、それで舞臺へ出れば立派に熊谷になつて見せたので、是は伎藝の妙と云ふのです、又團十郎は白をかへて、首を捻つても、見物はそれを思入の藝だと思つて賞めたものです、是は見物が團十郎に呑まれて仕舞つて居るのですが、私共が汗をかいて腹でこたへて居る苦しい藝を演ても、見物の方から見ると私の獨よがりになつて仕舞つて、一向感動を與へる事の出來ないのは、まだ私の伎藝が妙と云ふ所へ達して居ないのです、又白の調子と云ふものが矢鱈に大きな聲許り出したから聞えると云ふものではありません、只大きい聲を出す許りでは舞臺が締らない、舞臺を締めるには見物を引付るのが大事です、見物を引付るには思入も要りますが重に白廻しでやるのです、白で締める呼吸が餘程經驗を積まなければ出來ない事です、若い女形の白は上聲を拵へて出します、舞臺の調子は際立つて大きくするのではなく

平生の高調子の時と格別の變りはありませんが、それで土間桟敷向表面まで同じ聲に聞えるので、是も調子の極る迄になるのが一寸間があります、餘程以前の事龜島館で矯風會の芝居を演た事がありましたが、其時には聲が大變に樂に遣へたので、其時に始めて劇場の構造は注意すべき事だと思ひました、私共西洋の事は話に聞く許りで實際を知りませんが、今日の日本の劇場では如何しても調子を張り加減に遣ひますから、性來調子のいゝ人はとにかく、普通の調子の人には抑揚が取れません殊に女形は咽喉を殺してゝ聲を出すので、立役よりは低い調子になりますから、尙更抑揚に骨が折れるのです、私は知りませんが各國の名優の話を聞くのに、只伎藝に上達して居る許りでは第一位は占められないさうで、聲がよくつて美人の者が一位を占めるさうですが、日本の俳優も矢張天品が伎藝の素養になつて居るやうです

又女形が古金の扱ひ、首の扱ひには立役よりも重く持つ心掛けが無ければならぬのですが、夫も今日では氣を付る人が少ない樣です、尙女形は見物に目立つて賞められるのを避けなければならぬもので、目立つて賞められる樣に演たら、それこそ女の性根は拔けて居るのです、名人は性根を伎藝に現はしたものだと云ふ事で、つまり腹の中の仕事を伎藝に持出して演るのが本當です、併し李阿彌や菊五郎の話にも狂言にしろ伎藝にしろ、自分で工夫する物許りはないので、盜みものが澤山ある、併しうまく盜むのと拙く盜むだけの違ひはある、知れる樣に盜んだら泥棒でもすぐに捉へられるのと同じ事だと言つて居ました、團十郎でも時代物を演る時には、故人の型を悉く調らべたもので、それを腹へ入れて置て逆に反對の事を演て見せる事などがありました、私も時代物は手の屆くだけ型を聞て見ますが、或時は故人の考

と自分の考と符合する事もあります、それに又新物でも何にかモデルを拵へて演じる方がやりいゝのです、私が『孤城落月』の淀君を演じる前に巢鴨の病院へ參觀に行つて氣狂ひを見ましたが、其狂人の中で姿勢から擧動に就ての注目は自分の考に在るのです、總てモデルの撰み方の巧拙は其俳優の器量にある事です、伎藝の話もいろ〳〵ありますが、私がまだ子役の時代に、京都の芝居で助高屋の敦盛を見て、自分も是非演つて見たいと思つた所から、或日の事義太夫を呼んで「私は榮華の夢さめて」の所をやつて居ると、其時亡父が「そんな小さな事を仕てはいけない」と云つて、始めて自分が立つて敎へて呉れた事がありました、又翫雀と云ふ人は鏡山の尾上を勤めて草履打ちの場が濟むと、揚幕へ行つて居る間は下を向いた儘で一切口を利かなかつたさうで、長局へ出る時には自然と打しほれて居る樣子が何んと

も言へない程可つたと、云ひます、又召遣ひのお初が局岩藤と仕合をする所では、尾上は始終下を向いて何事か念じて居て、扨お初が勝つてから始めて顔を上げ、懷紙を出して手の汗を拭いたさうで、私も其通りに演つて居ましたが、斯う云ふ事になると近い土間に居る見物より外には其息は分りません、新富座で伊勢三郎を演た時に、私は義經を勤めて居ました、此役は道に迷つて三郎の家へ一夜の宿りを求めるのですが、三郎が他所から歸つて來た所で、互に顔を見合せる所があつて、脚本には爰の所に義太夫の文句がありましたのを、團十郎はそれを入らないと云つて、只床の絃で受けさせた許りが、初日までは私にもどんな事を演るのだか分りませんでしたが、幕が明いて見ると成程旨まいものです、私の方では刀へ手を掛けて身構へをする、伊勢三郎は刀へ手を掛けながら松明で義經の樣子を窺ふと云ふやり方で

す、すつくり息が合ひました、かう云ふのが後の型になるのです。

是は又十二時忠臣藏山科閑居の場で、團十郎の由良之助は態と酒に性根を亂して居ると母親はそれとは知らず女房を連れて郷へ引込むと云ふ件で、私は力彌を勤めて居ましたが、力彌だけは父の腹を知つて居る人なので其枕元へ來て「父上〳〵せめて大事の小口なり共」と白を云ふと、由良之助は起上つて力彌を煙管で打つのが木頭、三絃琴を彈きながらの道具飾りでしたが、私の云ふ白がどうしても團十郎の氣に入らないので或日の事口で言はずに腹で言へ」と言はれました、どうしたらいゝのかと種々考へた末それまでは、見物に聞こへる樣に言つて居たのを、今度は本當に由良之助だけに言ふ心に改めて、漸く小言を言はれない樣になつた事がありました、又千歳座で菊五郎が筆屋幸兵衛を演た時に、乳を貰ひに來る所があつて、私は

乳をやる奥さんを演て居ましたが、幸兵衛が身の上話をする間に、私が捨白を受けて居たのが、大層菊五郎の氣に入つて、お前は相手の白の息をつかせて呉れるのは感心だと賞められましたが、役者は總て相手の白をよく聞て居るのが、自分の見せ所になる事があるので、相手の白を氣無しに聞て居ては、見物に感動を與へる事が出來ません、團十郎の話に本讀が肝腎だと云ふ事を聞きましたが、全く本讀みの時に仕科は大概考へて仕舞ひます、殊に初めに考へた事が一番いゝやうです、是も團十郎の話に白は、必ず書抜き通りに言はなければならない物ではない、筋を知つて居れば却て其方が白が活ると云ひましたが、私も此説の贊成者です、只書抜きに許りかぢり着て、一字一句間違ひの無い樣に仕やうと思ふと、白が死んで仕舞ひます

明治十八年に千歳座で成田の仇討をした時、桂川力藏を演て居た權十郎が病氣で

私が三日代役に出ました、其時九藏が瀧見山と云ふ角力取をして居て、「福坊お前が力藏をするなら己も本當の瀧見山をして見せやう」と云つていろ〳〵教へて呉れましたが、「權十郎の力藏は角力取に成つていけない」と云ふ話で、何んでも構はない段違ひの角力に掛るのだから、只一生懸命に喰つて掛つて一ッはねられたらば、權十郎の樣にすぐ手を廣げて極つて仕舞つては角力取になるから、はねられたらタヂ〳〵とよろけて行つて、踏止つたときにはもう目が眩んで居なければいけぬ、さうして瀧見山は何處に居るだらうと思つて、キョト〳〵して、始めて瀧見山の居る方を見て、又しやにむに組着て來い、又はねられてからば、狙ひも何も狂つて仕舞つて組着いて來い、それで力藏は口惜くつて〳〵堪らない所から涙が出る其涙を無雜作に拂つては掛り、又組着く間には涙を拂つて掛つて來い」と云つて呉れまし

たから、私も一生懸命になつて其通りを勤めましたので、九藏もすつかり氣を入れて、實に結構な瀧見山を見せて呉れました、又舞臺へ出て居て見物に賞めさせ樣と思へば、それは賞めさせる個所も定つてあるのですし、甚だ容易ことですけれどもそれは小供を叱るのに只大きな聲を出して嚇すのと同じで其塲ぎりの事です、同じ小供に小言を言ふにもシンミリと言へば、却て其方がこたえる樣なもので、伎藝も其通り大きな聲を出して賞めさせるよりは、彼の精神になつて見物を引着ける方が本筋です、併し見物に賞められて、其調子に乘つて動くのは、見物に引着られるので、さうなると役の性根は取外して仕舞ひますから、餘程しつかり仕て居なければ始から終りまで見物を引着る事は出來ません、併し自分の伎藝が段々分つて來るに從つて怖いと云ふ念が出て來ると、只考へて仕舞つて何も出來なくなりますが、そ

れを一つ破つて仕舞へば本物です、私なども往時を振向いて見ると以前はどうしてあんな大役を科したらうと思つて冷汗が出る位ですが、其時代はつまり盲蛇で物に恐れないやり方であつたので、極意も何も心得ない無法なのでした、それですから踊にしろ芝居にしろ、却て何にも知らない人の方が勝手な事が出來ます、一つ本當の事を得たらば、自分にむづかしい事が分るだけ、手も足も出なくなります、斯く申す私も只今で修行最中ですから、我身に引較べて人樣の巧拙などはナカ〳〵言へるものではありません。

清元延壽太夫

（清元）（本姓岡村庄吉　文久二年八月生）

清元の起原　元來日本の音曲に關する一切の技藝は、中には餘程ふるくから傳はつているのも有るが、多くは德川時代に芽を萠したもの、或は少くとも葵の葉蔭に成長つたもので、清元の如きも即ち其の一に算へられると云ふ譯は、今日では幾んど氓つて居る富本節が、一時非常に流行つていた頃の事、同じ流派を汲んで居る富本齋宮太夫と云ふ人が、或る紛紜が原因で、不平の餘り、畢に富本を脱して、自から別に一派を起したのが、抑も清元の濫觴なので、云はゞ齋宮太夫は本家に對して叛旗を飜へしたやうな理窟になる、仍て彼は最初清水延壽齋と稱して居たが、偶ま德川三卿の一ツ清水家と同姓であると云ふので、餘程手きびしい詰責を受けた上に、

固より以後一切清水と名乘ることを禁ぜられた、スルト丁度その頃彼は元飯田町に住んで居たので、幸はひ清水の清と元飯田町の元とを締び合はせて、こゝに清元と名乘ることゝはなつた、是れが清元といふ一種の音曲が出來上つた謂れ因緣で、富本に對しては恰かも分家の觀がある、併し今日となつては最早本家は萎微振はなくなつて、却ツて分家株の清元の方が頗る熾な勢を示して居るで、此の涎壽齋を清元の初代として、其れから算へて今の延壽太夫は五代目に當るのだ。

五代目の素性　彼は文久二年八月向島で生れたと云ふから、今年は丁度四十七歳の分別盛り、實父は例の横濱で有名な富貴樓の主人齋藤吉之助で、彼は實に其の五男であるのだ、處で天性とでも云ふのか、幼少の折りから音曲が嗜きで、就中清元を無上の面白きものに思ひ、既に十二三歳の頃には、人知れず是れに心を寄せて居

た程である、其の中彼が十五の春を迎へたので、茲にやうやく兩親の許可を得て、其の頃植木店に居た菊壽太夫の門に入り、それより五年の間は殆んど一日の如く、ひたすら藝道の修業に浮身を窶して居た中に、道かに其の技倆はメキ〳〵と上達して、頓て古參の某々をも凌ぐ程の手腕となつた、が實の處その時までも彼は藝人として社會に立つ考へは無かつたので、云はゞほんの道樂半分に稽古をして、素人には珍しい上手だと褒められる位を願つて居たらしい、併し本人は餘程得意であつたのだ、少し話は後へ戻るが、明治九年すなはち彼が菊壽太夫の弟子となつた年に、素より年齒に應じて相當の敎育を受けて居たから、或人の斡旋で三井物產會社にはいり、間もなく勘定方を勤むることゝなつて、此處にかれこれ十年ほどの經驗を積んだ其の間も折り〳〵彼が自慢の喉を鳴して、數ある同僚にヤンヤの喝采を受け、

獨り私かに天狗をきめて居たとの話、やがて明治十九年の十月かねて彼の技倆に目星をつけて居たものと見え、故の守田勘彌に今では歌舞伎座の重役となつて居る田村成義などが媒妁をして、彼を岡村家の養子になほした、尤も最初は先例に倣つて榮壽太夫と名乘つて、絶えずみつしり四代目の敎授を受けて居たので、根が十分に心得ある彼のことであるから、恁ふなれば鬼に金棒、藝道ます〳〵圓熟の境に入り、三十一年一月、いよ〳〵五代目延壽太夫と改名するやうになつた、現今では東京だけでも四百人からの師匠連の上に立つて、一見さながら大統領の地位に坐つて居る、蛟龍ながく池中の物にあらずとは此の事であらう。

五代目菊五郎との關係　先代音羽屋と、彼との仲には、血系の上から云つても、藝道の方から觀ても、餘程親密な關係が結ばれて居た、菊五郎の養子となつた菊之助

（今は亡き人）は、たま〳〵彼の實弟に當るので、彼は常に菊五郎を叔父さんと呼んで居た、隨つて彼が舞臺の上に於ける研鑽の大半は、菊五郎によつて成されたと云つても可い位で、最初天狗であつた彼の鼻は、菊五郎の叱喝に逢つて絶えずへシ折られた爲めに、道がの彼もほと〳〵閉口の狀態で、常に翼々として菊五郎の叱喝を喰はざらんやう腐心して居た、或る時彼は予に語つて「イヤ五代目ぐらい能く萬事に氣を注けた人は有りません、鳥渡した事でも決して輕視つては置かない性で、飽まで熱心に研究なければ止まない人でした、ですから何事でも熟知て居るには皆驚いて居ましたよ、」その藝風から推しても、菊五郎の頭腦が極めて綿密であつたことは想はれる、恁ふ云ふ八釜し屋に瞰まれた彼は、最初の中こそ辛くも悲しくも思つたが、畢竟それが修業となつて、眞底から藝道を練達げることが出來たのである、

今彼の修業の時間を形式の上から見ると、菊壽太夫に手ほどきをして貰つた時代、四代目延壽太夫に叩き込まれた時代、五代目菊五郎の叱喝を喰つた時代と、都合三つに色分けをすることが出來る。

●●●●●●●●**舞臺の上の苦心と失敗**　都て何事でも左樣であるが、一旦習つたことを實地に應用するは、何の雜作も無いやうで、其れがなか〳〵容易な譯のものではない、最初は腕に十分の覺えある延壽太夫、なんの是れしきの事と多寡を括つて居たものゝ、扨ていよ〳〵舞臺へ出てやつて見ると、どうも思ふ樣に巧くゆかぬ、縱し會には良く出來たと自身で思ふことがあつても、乾度役者の方から苦情が出て、折角の苦心もあはれ水の泡となつて了う、菊五郎は常に斯ふ云つて彼に敎へていた「お前はナマジツカ俺に合せやうとするから不可、自分の好きにやんなさい、俺の方で合せて

やるから、何んでもお前の呼吸さへ眞個なら其れで澤山だ」さすがに菊五郎は名優であつた、强ひて曲調を合せやうとすれば、却つて呼吸を殺して仕舞ふ、其處らの消息に至つては、迚も門外の予等が解し得る限りでない。

●●●●●●●**聲に關しての意見**　先づ素人の聲で六七分ぐらい、三本の調子なら、黒人でも言分のない所、尤も十疊敷の間と、小劇塲の舞臺と、歌舞伎座あたりの大劇塲とでは、自然聲の抑揚に區別を立てねばならぬ、が芝居の調子は大抵二本と極つて居る、夫に男女の違ひで、語物に著しい影響及ぼすもので、月とか花とか又水とか云ふ極めて優美しい物になると、奈何しても女の聲でなければ妙でない、其の代りに莊大い强烈い事を語るには、是非とも男の聲でやらなくては身が入らぬ、是れは彼が予に語つた意見なのだ、其れから語る折りには、風が無ければ固より宜いが、少し

位の風なら、後方から吹く分には一向差支はない、唯だ前面からブツカツて來る風には、餘程閉口の模樣で、實際さも有るべき事である、次に聲の練習に關して彼の意見は斯ふである、「聲といふ奴は發しつければ乾度發るものです、甚麽に低い皺嗄れ聲の人でも、練習さへすれば自然と高調い美い聲が發るもので、惡聲少音といふは畢竟練習が足りないからでせう、で私は斯ふ思ふのです、人は自分で有つて居るだけの聲を、十分發すことは容易にない、事によると一生發さずに了う事があるだらう、折角有つて居るものを、發せば發るのに惜しい譯だ、其れも聲を高く發す必要の無い人は格別、どうでも聲を用はなければならぬ職業の者は、もと〳〵發る聲なら發さないのは嘘だ、仍で私は種々研究して居るのですが、現に私の門人の中にも、最初は迚も駄目だらうと思つた程惡聲の人が、練習は實際恐しいもので、當時

ではどうして却々立派な聲が發るやうになりました、ですから聲が惡いのは決して悔むには當りません、悔んで居る暇に練習さへすれば、或る時間内には必ず立つやうになるものです、」或は爾うであらう、其れでは食物には關係は有るまいか、予の質問に彼は斯ふ答へた、「短時間の影響は無論あります、例へば麥酒とかラムネ、或は酸ばい物其の外都て刺激物は惡いやうです、先づ葛湯の類、砂糖氣の物が一番宜いですな、併し是れはホンの短時間の話で、始終聲を練つてさへ居れば、何を喫ても影響るものでは有りません、何にしても練習と云ふことが肝腎です。」

●●●●●●●藝術の改良と保存　在來の習慣を見るに、都て遊藝の師匠には一種の弊風がある、例へば琴の如きも爾うであるが、中免許を與へるには幾程、奥免許を授けるには是れだけといふ樣に、巧に弟子共の虚榮心を利用して、尠なからぬ金圓を貪つて居る、

取る者も取る者なら出す者も出す者で、殿樣免許の腕前が何の役に立つと思ふ、延壽太夫は流石に其の弊を睨んで居る「苟にも人の師匠となつて居る者が、弟子の技倆をも調べずに、何でもかまはず金圓さへ貰へば免許を與ると云ふは、不都合極まる話です、其れでは第一弟子の爲めにも惡く、藝道の發達といふ方から申しても、至極阻碍になることゝ思ふのです、私なぞは本人の技倆次第、上達の如何によつて何でも敎へて居りますが、什麽も其の方が宜いやうです、爾う仕なければ、眞個の名人を養生すことは出來ませんし、名人が出現なければ、自然藝道の發展も企圖てられない道理であると思ひます云々。」其れに彼は淸元の譜を拵へて、永くあと〳〵までも傳へ、且つ何人にも容易く稽古が出來るやうにとの希望から、現に理學博士田中正平氏と力を戮せて、其の研究に餘念も無い樣子。

杵屋勘五郎　（長唄三絃）　（本姓石原廣吉 明治八年四月生）

斯道に志した動機　數ある長唄三絃彈の中で、とりわけ斯道の妙手と持囃され、現に歌舞伎座で立三味線のかたはら、兼ねて同座の囃子頭となつて居る杵屋勘五郎は、植木店の十二代目杵屋六左衛門（後に勘兵衛と改む）の三男で、今の十三代目六左衛門の實弟に當るのだ、恰ど十九歳の折りに、今の石原家の養子に貰はれたが、彼が十三歳の折り、親父の六左衛門に連られて、平素お出入りの本所横網町の尾張家へ行つた事がある、其時何かの話の序に、汝も父さんの樣に、三味線彈きになつて名をお擧げ、と同家の後室に唯ッた一言云はれたのが、稚心にも甚く膽に銘じたものと見え、夳し其れでは一番一意專心になつて、一廉の三味線彈きと成り、永く後世までも名

聲を遺してやらう、と根が怜悧な彼の事であるから、早くも心に臍を固め、歸へると直樣三味線を引張り出して人知れずポツン〳〵彈き初めた、其れからと云ふものは、別に師匠といふ師匠は取らなかつたけれど、常に親父や兄の稽古振りに心を注け、唯もう一心不亂に研鑽をした爲め、何時か見やう見眞似、聽きやう聽眞似で、竟に斯道の巨匠として、汎く世に知らるゝやうに成つた。

舞臺上の苦心　元來この長唄三味線が芝居道へ入つたのは、寛永の頃に名人と云はれた三代目杵屋喜三郎（後に勘五郎）が矯矢で、其後しだいに芝居と杵屋とは、極めて深い關係を結ぶやうになつた。彼が初て芝居へ出て彈いたのは、恰ど十五歳の時で、故人團十郎が鳥越の中村座で盲景清を演た時であつた、其後しば〳〵芝居へ出て居たが、什麼も二の音が拙い、其れも自身では氣が着かずに居ると、頓て多く

の人が爾う云ひ出したので、初めて氣が附いて見ると、成程拙い、是れでは不可と百方苦心をして見たが、奈何した加減か思ふ樣にゆかぬ、仍て深川の不動尊へ日參して、傍ら一心に稽古を勵んで居たので、辛と三筋とも音色を揃へる事が出來た、尤も先代の菊五郎には絶えず叱言を云はれたさうで、一體この菊五郎といふ人は、前に延壽太夫の處で言つた通り、萬事に意を注ぐ事が頗る綿密で、縱令自身では三味線を彈かなくても、耳は恐しいまでに發達して居たから、道がの彼も時折り錯誤を睨まれて、嚴しく窘められて居た、併し其爲め彼の技倆を上達た事は、固より言ふ迄もなく、今彼が舞臺で苦心をした一ッの例を擧げて見やう、明治二十六年、名古屋の寶生座の舞臺開きに、先代菊五郎、先代秀調、故人菊之助、今の梅幸（其頃榮三郎）などの一座と共に聘れた折りの噺で、其時の狂言は『時鳥』であつたが、丁

のである、して見れば彼の眞價も大概判るではないか、期道に就て彼の意見を聽くに、「私は大い音を出す事を研究しました、其れで私の絃は、一が十八、二が十五、三が十二で、皮は普通のよりも厚いのを用ひます、其れに彈き方にも種々ありますので、例へば大薩摩がゝつたもの、芝居で申します荒事的の物と、眞の長唄とでは、餘程區別が御座います、大薩摩がゝつたものは、荒く强く彈きますが、眞の長唄では、極く艶ッぽく、柔かに彈かねばなりません、其れに彼の掛聲ですな、あれが何でも無いやうで、却々加減の有るものです、唄う人の呼吸が長ければ、其積りでやらねばなりませんし、短ければ、蔽せて繕ふといふ樣に、絶えず唄う人の調子を對けて行かねばなりません、恁ふいふ事が判りましたのも、畢竟長年舞臺で苦んだお蔭で御座います。」

●三絃の彈ける法　小さい子供衆に、勝手よく三味線の彈ける法をお話しませう、御承知の通り、お小さい時は三絃を彈くに右の足を横へ出して、而して胴を乘せなければ駄目なもので御座いますが、三絃の棹がズット上るので、誠に惡い格合です、今私の申すのはさうしないで彈ける法なんです、まづ五六寸ぐらいに輪にした紐を帶留でも又は前掛の紐なりを通して、其輪の先へ三味線の胴の先を掛けて彈けば、何うやら前から見て構へが宜しうムい升、尤も是は御承知の仁もムいませうが、まだ御存知ない方だけに申上ます、それがと言ふと此の構へと申ものは大事でムい升からで、成らう事ならチャンとして彈馴れた方が宜しからうと存じます、親父より聞傳ました構へ方を申し升と、先づチャンと座り、膝を少し割つて其膝の上に醤油樽ぐらいの物を載せた心得になり、それから三味線を持ちましたら、左の肩と轉手

度皐月と縁切りの場で、菊五郎の御所の五郎藏が、「闇があるから覺えて居ろ」の捨白で引込になると、奈何した加減か例のチヽリチリの調子が巧くゆかぬ、幕になると直ぐ菊五郎に甚く叱責を喰つた、辛くて溜らないから、人にも聽き自身でも種々研究へて、扨て翌日其場になつて見ると、矢張り菊五郎の歩調に合はない、斯ういふ工合で十二日の芝居に唯の一日も滿足にやれなかつた爲め、菊五郎は甚く慍いて、「汝は迚も駄目だ」と言つて叱り飛した、仍て彼も口惜く思つて、今に見ろと手ぐすね引て待つて居ると、恰好其一座が京都の四條南座へ乘り込んで、前と同じ狂言を打つ事になつたから、今度こそは會稽の耻辱を雪がねばならぬと、力味返つて居た甲斐もなく、「愈〳〵」と云ふどたん場になると、脆くも前と同樣に失敗つて了つた、其内に一日と經ち二日と過ぎて、早くも五日目となつたので、最早溜らなくなつたもの

と見え、今日また駄目なら東京へ歸つて了う、と獨りでシク〳〵泣いて居たが、天も其心情を憫んだものと見え、其日に初めて巧くやれたので、ホット一息吐いて居ると、菊五郎は彼を自分の室へ招んで、「今日は巧くいつた、何時もあの呼吸を忘れないやうに」と平常になく褒られた時は、眞に蘇生の思ひをしたさうだ、其れより彼の技倆は日に增し上達して、芝居道にも重く用いられるやうになり、明治廿九年彼が二十二歳の折りに、團十郎が歌舞伎座で『娘道成寺』を演した時、彼は撰ばれて同座の立三味線に昇進した、（最初は父の勘兵衛が同座雛子方の取締であつたが、其時父は隱居して兄の六左衛門が取締となり、三十八年一兄が隱居したので彼が取締となつた）尤も其頃までは、今日の如くに容易く立三味線にはなれなかつたさうで、先づ初見習から四枚目、三枚目、二枚目まで昇進するのでさへ、却々骨の折れて時代であるから、更に進んで立三味線となるには、餘程の技倆が無ければ出來なかつた

のである、して見れば彼の眞價も大概判るではないか、期道に就て彼の意見を聽くに、「私は大い音を出す事を研究しました、其れで私の絃は、一が十八、二が十五、三が十二で、皮は普通のよりも厚いのを用ひます、其れに彈き方にも種々ありますので、例へば大薩摩がゝつたもの、芝居で申します荒事的の物と、眞の長唄とでは、餘程區別が御座います、大薩摩がゝつたものは、荒く强く彈きますが、眞の長唄では、極く艶ッぽく、柔かに彈かねばなりません、其れに彼の掛聲ですな、あれが何でも無いやうで、却々加減の有るものです、唄う人の呼吸が長ければ、其積りでやらねばなりませんし、短ければ、蔽せて繕ふといふ樣に、絶えず唄う人の調子を割けて行かねばなりません、恁ふいふ事が判りましたのも、畢竟長年舞臺で苦んだお蔭で御座います。」

三絃の彈ける法 小さい子供衆に、勝手よく三味線の彈ける法をお話しませう、御承知の通り、お小さい時は三絃を彈くに右の足を横へ出して、而して胴を乘せなければ駄目なもので御座いますが、三絃の棹がズット上るので、誠に惡い格合です、今私の申すのはさうしないで彈ける法なんです、まづ五六寸ぐらいに輪にした紐を帶留でも又は前掛の紐なりを通して、其輪の先へ三味線の胴の先を掛けて彈けば、何うやら前から見て構へが宜しうムい升、尤も是は御承知の仁もムいませうが、まだ御存知ない方だけに申上ます、それがと言ふと此の構へと申ものは大事でムい升からで、成らう事ならチャンとして彈馴れた方が宜しからうと存じます、親父より聞傳ました構へ方を申し升と、先づチャンと座り、膝を少し割つて其膝の上に醬油樽ぐらいの物を載せた心得になり、それから三味線を持ちましたら、左の肩と轉手

とを見比べるので三味線の胴を右の股の上へのせる置方は膝頭へ近い方を四分、腰へ近い方を六分の割合に明け升のですそれから、撥の持ち方は、撥の大小に拘はらず、見た目で四分六に持てば宜いのです、細く申せば假に五寸の撥なら、撥を持た三本の指から前へ六分後へ四分といふ割に持て拇指を前へ出すのですが、餘り出し過ると及び腰で何か取るやうで見た目が惡い、小指は後へやり升のです、それから此音じめを出すにも一勉强です、第一に中指に拇指へ一寸力を入れ、小指の工合で調子のとれるものですが、小指を上げて彈く人と落して彈く人とありますが、それは本人の工夫ひとつです、小指を上げるとは撥の角へ一寸かけるのです、落すとは撥を跨いで後へ入れるのです、それから撥を持た腕を胴へ置くには、其胴掛から前へ出る手首の間をやふ〳〵一寸五分位に致すので、これで前へ六分後へ四分といふ

割になり升、手首の出過ぎたのは餘り工合の好いものでございません、これは子供老人には限りません、又音じめは持て產れた物だと言ひますが、當人の勉强次第だらうと思ひます、此音じめに大きいのと小さいのとあり升が、大きいからといつて色氣も味もなく、ボキ〳〵いふのじや困り升、又小さくても云ふに云はれぬ音じめもあり升、たゞバテ〳〵許りでもいけませんと、斯う聽傳へて居りますからナカ〳〵むづかしいものです。

芳村伊十郎

（長唄）（本姓鵜澤德藏 安政五年十二月生）

斷食と水垢離の修業　歌舞伎座の立唄、長唄會の副頭取などの地位に居る、長唄界の明星六代目芳村伊十郎は、靜岡縣藤枝の生れで、父は大工の棟梁であつたといふ事、八歳の折りに、杵屋正十郎の門人杵屋彌吉に弟子入りをして、四生の間一心不亂に稽古をして居たが、頓て時勢は一變して明治と改まつた年に、東京より有名の藤田千藏が來たので、彼は更に此人について四五年の研鑽をして、其後仔細あつて明治八年までは中絶て居たが、什麼も地方に居ては十分の修業も出來ないので、一ツ東京へ行つて斯道の蘊奥を極めやうと、其年の二月に東京の新富町へ來て、直と杵屋長四郎の門に入つたが、間もなく長四郎の斡旋で、銀座の五代目芳村伊十郎

の内弟子となつた、丁度二年ほど居た、此時の彼の苦心は非常なもので、先づ朝は寢床を離れると直樣掃除萬端の事に取掛り、其れを仕舞ふと十二時までは斷食の苦行、其間に四ツ谷のお岩稻荷へ日參して、只管藝道の上達を祈つて居た、或る日のこと、丁度夏の眞盛りのことで、櫻田門の外まで來ると、暑さは熱し腹は素より空虛と來て居るから、眼が眩つて最早意地にも我慢にも歩けなくなつたので、堀の縁にあつた井戸の所へ來て水だけは何卒お赦し下さいと心内に念じながら、一掬の水で喉を潤した事もあつた、又冬になると寒三十日の間は、家内が寢靜まつた頃を見計ひ、裸體のまゝソツト井戸端へ出て、何ばいと無く水を浴るそして、厨所へ來て一心にお岩稻荷を拜んで居た、スルト此事が何時しか師匠の祖父遊古の耳に入つたので、「何んだ馬鹿な眞似をして廢めて了ひなさい」と言つたのを、傍で聽いて居た

師匠の伊十郎が、なあに「本人がやるのに關係う事はない、打捨つといた方が宜い」と言つて呉れたので、彼は其苦行を續ける事が出來た。

芝居道との關係 明治九年一月、芳村金五郎と名乘つて、初めて新富座へ見習に出た、此時の狂言は『妙々車』で、坂東彦三郎の座長、先代中村芝翫の中軸、先代尾上菊五郎の立女形、先代市川左團次の書出し、先代澤村訥升の客席といふ順であつた、其時彦三郎の度九郎が、訥升の旅人を橇へ乘せて舞臺へ出るところで、兎々の歌を自分では巧く唄つた積りで居ると、彦三郎が「那麽者にやらしては不可い、廢さして仕舞へ」と、甚く怒つたので、夫から毎日邪魔にならぬやう節と唄つて居たが、其爲め彼は兎々の綽名をつけられた、でさうかうして居ると、其年の十一月の晦日に新富座は例の盥屋火事（檜物町から出た大火）で燒失ちたので、其れよりワキ狂言も無く

なり、一切の型が變つて了つた、といふ譯は、故人守田勘彌が之を機會として、渾てに改良を加へ、新富座の普請が出來上つて、愈よ明治十一年六月に開業式をした時には、下廻り一切を廢して了つた斯いふ工合で殆んど昔風を失なつて、了つた、翌年五月同座で故人團十郎、岩井半四郎、先代菊五郎、先代左團次などが『勸進帳』を演つた時、彼は杵屋正十郎の斡旋で、辛と出して貰つたか、餘り人數が多い爲め、各自代りやつて出て居たのである、其れより彼は次第に技倆を上て、明治十四年五月、新富座で梅壽の追善興行に、先代菊五郎が『土蜘蛛』を演した時、三枚目に昇進し、十六年六月、同座で菊五郎が『茨木』をやつた時、二枚目となり、同時に芳村伊十郎と改名した、さうして廿二年までは新富座へ出勤て居たが、二十三年の一月、（歌舞伎座の舞臺開きは二十二年十一月で彼は出なかつた）京都の祇園館の開業式に、故人團十郎に連られて行つた折

り、本席では無つたが立唄を勤めた、其時の狂言が一番目『高時』中幕『六歌仙』二番目『紅葉狩』であつた、其後東京へ歸つて、歌舞伎座で團十郎、權十郎、先代壽美藏など成田屋一派が『相馬物語』の通し狂言に、大切り『道成寺』を演した時、植木店の六左衛門の世話で、本席の立唄に昇進した、其れより今日まで幾んど十七年の間、歌舞伎座で立唄を續けて居る。

三遊亭圓喬（落話）

（本性柴田清五郎 慶應元年九月生）

圓朝門下の秀才 故人圓朝の門人といへば數多ある、其の中で終始一貫の行動を取り、圓朝より外には決して他の師匠に就なかつた者が、今日では僅かに四人しか殘つて居ない、即ち三遊亭圓樂、同圓左、同新朝、其れに彼なので、就中彼は圓朝の門人中でも、お世辭の無い處が、先づ首席に坐る技倆は慥かにある、彼の生れた所は本所なので、父は何んでも幕臣で千石以上、取つた人らしい、處で彼が四歳の折り、（慶應四年閏五月に明治元年と改つた年）世の紛擾を避けて、田舍の乳母の家に行つてゐたが、六歳の時、再び本所へ歸つて來た、頓て明治も五年を重ね、彼が八歳になつた時、初めて故人、圓朝の門に入り、此處に朝太といふ藝名を貰つたので、茅場町の宮松

亭へ出たのが、抑も高座へ上つた皮切りである、序に一寸知らない人の爲めに記いて置くが、彼は三遊亭といふ代りに、橘家を用ゆることがある、或は橘家圓喬といつた方が、却つて通りが宜いかも知れぬ、是れは初代三遊亭圓生（初め山遊亭猿松といつた人）が、狂歌の雅號に橘家を用ひたからで、其れが慣習となつて、代々橘家圓喬といふ樣になつたのだ、其れに最う一ッ言つて措くことは、此圓喬の喬の字で、是れは初代（圓生後に圓橘）は橋と木偏をつけてゐたが、二代目（朝代の實子で初め山松亭蔵橘といつた人）から木偏を除つて、圓喬といふ樣になつた、扨て話は前に戻つて、彼が未だ客の前に出ぬ内は、師匠の圓朝が、口移しに小話を百ばかり敎へる、其れで客が來ない間に、高座へ上つて見習ひで敎つた話をやつて見る、其れを圓朝が聽いて居て、其處が拙い、此處が惡いと、假名一ッ違つても訂すやうにするので、敎へる人も習ふ方も、生やさしい譯のもの

では無いのだ、「什麼して當時の修業は、今日と違つて却々骨の折れたものでした、其代りには敎方も親切で、就中師匠などは餘程叮嚀に敎へて呉れました、ですから敎はる方でも熱心になつて、決して今の者のやうに上の空では無つたのです」と彼は予に話した事がある、恁ふいふ鹽梅に修業をした曉、愈よ明治十八年の十二月、丁度彼が二十一歳の時に、四代目圓喬と改名したので、直と翌年の正月に、瀬戸物町の伊勢本亭で、初めて眞を打つたのだ。

望月太左衛門

（小鼓）（本性安倍清左久文久二年三月生）

一番太鼓に空前の名譽　先代の名を襲いで、七代目望月太左衛門となつて居る彼は、今日小鼓では天下無敵の名人と、予が知つた振りをするまでも無く、現在歌舞伎座の立小鼓であるからには、百も承知、二百も合點、三百屋の口吻で陳述ずとも、夙に判つた事なのだ、彼は仙臺市は柳町の生れで、十二歳の折りに東京へ來り、最初草鞋を脱いだのが、當時立女形の名人市川門之助の宅である、其れより新富町の六代目望月太左衛門（俗に大和屋）の弟子となつたが、間もなく太左衛門が重患に陷つた爲め、太左衛門と兄弟弟子の望月長九郎に預けられ、其内弟子の樣になつて居た處、頓て明治七年五月に太左衛門は物故つたので、茲に彼は愈よ長九郎の門

人となり、望月長左久と名乘ることゝなつた、彼が初めて見習で出た劇場は、中橋の澤村座で、其れは未だ太左衛門が病歿ない内、明治七年二月の事である、其時の狂言は一番目『鶯塚』中幕『阿古屋』大切『櫻田騷動』で、座頭が先代澤村訥升、書出しが中村壽三郎中軸が坂東太郎であつた、今の源之助も丁度其時清十郎といつて、彼と同じく初めて澤村座に見習で出たので、折り〳〵樂屋へ太鼓を持つて來ては、彼に直して貰つたさうである、同年の三月彼は初めて新富座へ出た、狂言は一番目『高松城水攻』中幕『宮島闘鬪』二番目『野晒悟助』其れに大切が『七變化』で、是れは先代芝翫が歌右衛門の二十三回忌の追善に出したものである、で其時の一座は先代菊五郎に先代芝翫などであつた、其れより繼續いて同座へ出て居たが、明治九年正月、先代芝翫、坂東彦三郎、先代訥升などが同座で『六歌仙』を演つ

た時、初めてワキ太鼓で出囃に出た、其時の話である、彼が一番太鼓（午前四時頃）を打つた手際が、如何にも巧かつたので、例の筑前屋の頭取（八釜しやで有名な人伊十郎の處で云つた）が褒美として五十錢を彼に與つた五十錢といへば今でこそ何んでも無いやうであるが、其頃にしては却々大したもので、殊に筑前から縱令何程でも褒美を貰うといふ事は、滅多に無い例であつたから、彼は非常に喜んで、銀座の伊十郎に六翁（其頃は長次郎二人とも今は亡し）と三人連立つて態々筑前屋へ謝禮に行つた。

●●●●●●●紀念の鼓と疊屋火事　明治九年十一月廿九日の夜、彼は金五郎（今の芳村伊十郎である事は前に伊十郎の處で云つた）と二人で新富座の樂屋へ泊つてゐたが、當夜は恐しく風の吹いた晩で、宵の口に二人は近所へ遊びに出掛けて、頓て歸つて來て樂屋に寢て居ると、十二時半ともも覺しき頃、樂屋の番人で彦兵衛といふ男が、慌たゞしく樂屋へ駈けて來て、「火事で

す、お起きなさい」と搖り起したので、彼は寢惚け眼を擦りながら、窓から首を突出して見ると、火事は檜物町の見當で、今や燃んに八丁堀の方へ吹きつけて居る、「なあに大丈夫だ、ドレ今一と寢入り」と彼は再び眠りに就いたが、霎時たつと又彦兵衛が飛んで來て、「不可ませんね、那麼に暢氣ぢや、早く起きて下さい、大變ですから」といはれて、眼を醒すと、何んだか表が騷々しい樣子、急いで寢夜の上に帶をグル〳〵捲き着けて、樂屋を飛び出して表へ廻つて見ると、其處には龍吐水が幾個となく並んで、早くも一切の準備を濟して居たから、コリヤ大變と尻引つ搦げて韋駄天走りに駈けつけて來たのが、不動新道の自身の家、其時には既に仲間の多人數が來て、萬端取り片付てあつたので、何故早く來ないかと、彼は大叱言を喰つた、荷物は一切鍛冶橋の堀端へ出してあつたから、其處へ行つて荷の見張りをして居る

と、頓て其處へも火が廻つて來たので、大勢と一緒になつて荷物を拋り出して居た、スルト其折り一人の巡査が取り出して呉れたのは、一個の皷箱で、今でも其皷は歌舞伎座の囃部屋に措いてある、此時の火事が有名な畳屋火事で、新富座も此火災に罹つたことは、前に伊十郎の處で云つた通り。

歌舞伎座の立小皷となる　彼は只管斯道に心を碎いた爲め、年と倶に彌よ技倆を上げ、明治十七年鳥越の中村座が開業式をした時に、故人團十郎の『翁三番叟』で、彼は立大皷に昇進した、次に明治十九年今の明治座が久松座から千歳座となつて、初めて大芝居の格に入つた時、其舞臺開きに立小皷となつた、此時の一座は團十郎、先代菊五郎、先代左團次、後に仁左衛門となつた片岡我童抔で、『碁盤忠信』『筆屋幸兵衛』『對面曾我』などの狂言であつた、夫から明治二十二年十一月、いよ〳〵

歌舞伎座が舞臺開きをして、一番目『水戸黄門記』の通し、大切り『六歌仙』で、團十郎、菊五郎、先代左團次、故人權十郎、先代家橘、故人高砂屋福助、今の小團次などの一座であつた時、彼も初めて同座へ出たのである、同年に再び歌舞伎座で『六歌仙』を演じた折り、彼は業平（團十郎）の立太鼓と、喜撰（菊五郎）の立皷を打つた、更に其翌年、歌舞伎座で團十郎が初めて『道成寺』を演した時、彼は二役勤めて大皷小皷を打つた、爾後二十七箇年の間は、繼續いて長左久と名乘つて居たが、明治三十三年に四代目長九郎と改め、更に三十六年に先代太左衛門の後を嗣ぎ、三十八年四月、兩國の伊勢平樓で七代目太左衛門の襲名披露をしたのである。

竹本小清（義太夫）（本姓佐久間はろ　文久三年二月生）

有繋は名人の娘　父は大阪の人で、初代大隅大夫の絃を勤めたといふ、其頃名人の噂があつた鶴澤清八である、此人仔細あつて東京へ引き移り、日本橋高砂町に一家を構へて居たうちに、頓て女房を迎へて誕生たのが、今日東京の女義太夫の中で、一際卓抜て居る竹本小清、其後彼が二歳の折りに、淺草觀音寺内に轉居して、十四歳までは其處に居たが、明治九年に再び父に連られて大阪へ赴き、永らく腰を据へて居た爲めに、根が義太夫の本場だけあつて、遂ひ聽き囓りに義太夫を覺え込み、自分も早晩斯道の藝人になる心算で居ると、ドッコイ左樣は問屋で卸さない、父は頭から「女が藝人なんぞになるものでない」と、什麼して却々許して呉れさうにも

無いので、詮方なしに斷念めて居たが、讀者諸君も御存じの通り、大阪といふ土地は、一體が女義太夫を有難がらない風であるから、父も彼を女義太夫に仕立たところで末始終の目的が無いとでも思つたのであらう、仍で父には極く秘密にして父の弟子の先代鶴澤叶に賴んで曾根崎の藝妓になり、專ら義太夫でお座敷を勤めて居た、其うち攝津大椽、津太夫、鶴澤寛治など父の友人や門弟に就て、幾んど十五年の間、ミッシリ義太夫を習ひ込んだので、彼の技倆は恐しいまでに上達した、最早大阪では誰一人知らぬ者は無い程の大評判。

五千圓の借金　大阪で小清といへば、白雲頭の小僧までも、ア、彼の女かと頷く程の人氣者となつたが、平素贔負になつて居た伊集院兼常といふ鹿兒島出身の人が今度東京へ歸つたら、近い内に客を招ぶ筈であるから、何卒是非俺と一緒に行つて

呉れいとの頼に、宜しう御座います、參りませうと快く諾つて、久しぶりで東京へ來た、此時彼は諸所の座敷へ招ばれて、伊藤松方の諸元老を初め、澁澤大倉などの人たちに厚き贔負を受け、此處でも非常な人氣を博して、纔か一箇月許りの逗留で大阪へ歸つた、其頃彼は或人物の爲めに借金連帶の印を捺してやつたのが、肝腎な本人が死んでしまつたので、自然五千圓程の負擔が彼の肩へ落ち懸つて來た、之を女の脆弱い腕で辨償ふことは容易でないから、今一稼して見やうと、再び東京へ來て日本橋數寄屋町に宿を取り、諸所の客席へ出て居たのを、頓て各寄席の主人が聞き込んで、一番寄席へ出て稼いではと持ち込んで來たがなんぼ、何んでも寄席へなんぞ出るもんかと云ふ意氣組であつたから、體よく之を謝絶つて居たものゝ、却々負債を拂ふといふ運びにゆかぬので、竟に心を極めて寄席へ出ることゝなり、最初

睦仲間から多少の金を借り受け、其れに茅場町の先代宮松亭の十分なる補助によつて、纔かに負債は形をつけて了つたが、偖て愈よ義太夫語りとなつて寄席へ出た當座は、現今と異つて其頃の客は、唯だ容姿許りに目を注けて、眞に義太夫を聽く耳を有つて居る者は尠なかつた爲めに、折角の技倆も人に知らるゝの機會なく、空しく無名の藝人となつて居たが、流石に彼の苦心の効果は現はれて、一年二箇月目頃から辛と賣り出すことが出來、頓て新橋の濱の家をはじめ、各區の消防夫連の贔負を受くるやうになり、茲に彼の地盤は彌よ堅まつたのである。

●●●●●●お前さんのお蔭です。是は彼が大阪に居た時の話、或時藝妓連が集つて、夫々稽古をして居たが、彼も一緒になつて『猿廻』しをやつて居ると、側で見て居た一人の婆さんが、突然「お前さん何んて彈きザマだよ、全然物になつて居ないぢや

ないか、成程お前さんのお父さんは豪いか知らんが、お前さんと來たら型なしだね」とさも憎々しく人中で侮辱められたので、性が負ず嫌ひの彼は、赫として此糞婆め打ちのめしてやらうかとは思つたが、イヤ〳〵其れよりは此方が立派になつて、此奴の面を見返してやらうと、其れからと云ふものは、殆んど夜も寢ない位にして、自身より藝が上手の人と見たらば、縱令年少の者にも教を聽くといふやうに、一生懸命に斯道を勵んだので女の一念巖をも徹すの比喩の通り、彼の技倆は見る〳〵中に上達して、最早何處の溫習會へ出ても、奈何な演藝會へ招ばれても、毫末も他に敗北を取らぬやうになつた、仍で曩に彼を侮辱めた婆さんも、有繋に面目ないと思つたので、何卒寬恕して下さいと彼に詫びると、「私が今日どうか恁うか彈ける樣になつたのも、云はゞお前さんのお蔭なんだから、私こそお前さんにお禮をいふのが

當然です」彼は斯く口で言つた許りでなく、其後長らく此婆さんへ小遣錢を與つて居た、男も及ばぬ大い度量ではあるまいか。

●●●●●●●●

藝といふ奴は妙なもの　彼が予に語つた藝談の中で、殊に面白いと思つたのは左の辭である、「藝といふ奴は妙なものでして、最初まだ駈け出しの時分は、什麽も自分許りが巧くつて、他人は皆んな拙いやうに見えます、半途になつて藝が多少出來て來ますと、他人も巧いが自分も巧いと思ふのです、最後に其れが眞個に上達して來ますと、他人許りが巧くつて、什麽も自分は拙い、自分で良く出來たと思ふことは殆んど無い位で、爾うなると人の知らない苦心を致します」。

邑井一　（講談）（本姓村井徳一　天保十四年三月生）

●●●●●●今日までの路歴　邑井一といへば、講談社會の耆宿として、今日斯道では僂指の人物である、「ナァに齢は老つても技倆までは耄れない」といふ氣慨は、其演口に瞭然と見えるので、慥かに壯者を凌駕ぐの元氣は有るやうだ、彼は其昔牛込南徒士町に生れたので、彼の父は徳川の御家人であつたさうだ、併し彼は稚心にも、武門の端くれなんぞになるよりは、寧そ講釈師となつて名を擧げた方が宜い、と平素私かに思つて居たから、同じく講釈を聽いても、他の者よりは一倍意を注けるやうにして居た、其れで十三四歳の頃には、素人として什麽にか恁うにか演れるやうに成つたので、彼も益す乘氣になつて居ると、十六の齢に愈よ心を決して初代與龍齋

貞水の門に入り、名も菊水と改めて、初めて見習で出たのが、日本橋四日市の翁稲荷の社内に在つた四日市亭、(今は無い)其れより夜の目も寢ずに一心不亂になつて研鑽をして居た爲め、技倆は日を經るに隨ひメキ〳〵と上達して、廿一歳の時には貞朝となり、二十三歳で更に巴水と改め、今では角力茶屋になつて居る米澤町の米澤亭で、初めて晝席の新看板を揚げるやうになつた、其れより又種々の經歷があつて、竟に淺草公園の金車亭で、邑井一と改名の披露をしたのである(管々しい事は面白くないから除く)

●●●●●●昔の講釈と今の講釈　彼は憮然たる顔色で予に語つた、「昔は軍書講談といひますと、張り扇と普通の扇とを持つて、必ず袴を穿いてやつたものでした、其れに婦人の音調を使つたり、體を動搖したりすることは、一切できませんので、其れは却々嚴格いものでした、ですから話が一體に地味で、老人より外には聽きに來る客は無

かつたのです、其換りには客は毎日必ず同じ顔でしたが、入りは至つて僅少い、先づ精々四五十人ぐらいが關の山で、百人もあれば芽出度いと云つて祝をしたものです、其内に初代錦城齋典山が現はれて、拍子木を使うことを始め、お家騷動物や大岡政談などを讀み出しまして、講談を餘程やはらかに碎きましたから、老若男女何人にも解るやうになり、客はドン〳〵殖へて來ましたが、其爲めに肝腎の型は大分壞れて參りました、スルト又石川一口といふ講釋師が飛び出して、義太夫口調で佐倉宗吾の子別れ等をやりますので、是れも非常の大受でした、全體一口といふ男は、牛込神樂坂の漆器問屋の主人でしたが、素人義太夫では眞打をやつて居た位で、根が餘程の道樂者でしたから、竟に可なりの身代を潰して了つて、仕方がないから講釋師となつたのです、先代小圓次なぞも一口を自分の宅へ招んで、聽いた譚を森田

座で百日演つて大入を取つた事がありました、此人後に一夢となりましたが、五十五歳で歿りました、未だ此一夢が生て居る時分に、松林伯圓が出て來て、是れが却〳〵の達辯でしたが、就中人情物は上手でした、當時の客は一夢、典山、伯圓の三派に分れて、各自肩を入れて居ましたので、「人斬り伯圓斬られ一伊賀越典山」と評判を取つた位の人氣でした、伯圓は人を斬る呼吸が眞に迫つて居る、一夢は切られる狀態が巧い、典山は伊賀越が得意といふので、這麼評判を取つたのです、今日では純粹の江戸ッ子といふは、殆んど居ないやうですから、講釋を聽く耳も昔とは全然違つて了ひ、什麼も新しい物を讀まないと、客受けが惡いやうです」

若柳壽童

（舞踊）（本姓若林勇吉 弘化二年六月生）

若柳の一派を起す。踊りには種々の派がある、最も古いところで、西川、花柳、其れから中村、坂東、藤間、水月、市山、菊川、志賀山、若柳といふ樣に、各自一派を立て、自己の流儀を弘めて居る、尤も中には既に廢れて了つて、纔かに其名稱計りが殘つて居るのもあるから、一概には言へないが、先づザット如斯ものであらう、仍て右の若柳派を起した壽童といふ人は矢張り花柳の分派、分派といへば語弊があるけれども、曩に花柳流を習ひ込み、後自から一派を案出したと云ふからは、花柳の出身と言つても然るべしである、其れで彼が生れた所は新吉原の揚屋町、六歳の折り市山幸二郎に就いたのがそも〳〵彼が踊りに手を出した皮切り、幸二郎に

習ぶこと足掛け四年、頓て幸二郎が歿つた爲め、田町の袖摺り稻荷の側に居た、東屋といふ茶屋の娘の坂東ヨシに就て三年程習つた、すると、右のヨシ女が他家へ嫁くことになつた爲め、更に彼は別の師匠に就いたのが、其頃斯道の鬼才といはれた花柳壽輔であつた、此時彼が恰ど十五歳、始めて花柳芳松といふ名を貰つたのである、夫からといふものは、今までとは異つてミッシリ藝道に身を入れたセイか數年の後には、遉がの壽輔も舌を卷く程に上達した、其れであるから、縱令て、解は市山流であつても、また姑らく坂東流を習つたにもせよ、彼が踊りといふものに就て、單に形式ばかりで無く、其眞髓までも併せて會得する事が出來たのは、恐らく壽輔の門に入つてからであらう、處が好事魔多しの比喩で、不圖とした譯から壽輔と彼との間に一抹の黑雲が描かれた爲め、彼が四十五歳の時、斷然花柳の門を退き自己

の姓の若林の若と、流石に忘れ難き花柳の柳とを結合せて、茲に若柳と名乗り、名も吉松と改め、別に一派を起したのが、今の若柳派で、爾後永らく吉松といつて居たが、明治三十八年明治座で今の壽童に改名したのだ。

●●●●●●青年の折りの難業　彼が二十三四の頃、師匠の壽輔に隨て某座へ出勤て居たが、一日甚く腹が痛むので、意地にも我慢にも堪へて居られなくなつたから、囃子室に潜り込んで横臥て居ると、師匠に發見られて、「腹が痛いなんて僞を吐くのだらう、此怠惰漢が」といくら事故を言つても聽き入れず、無理やり引張り出された、時には、寧そ死んで了うかと思つた程辛かつたさうである、但し是れは本人の直話を其儘。

山室千代子（箏曲）（明治八年十二月生）

●●●●●山田流の箏曲　山室千代子は、去る十月四日に物故つた山室翠景の養女で、養父の仕込とはいひながら、山田流の箏はなか〳〵達者なもの、實をいへば、予は翠景を紹介する心算であつたところ、去る頃遽かに不歸の客となつたので、已むなく養女千代子を紹介することゝした、是れは、生前いさゝか知己の縁ある、翠景に對して、予が盡す寸志の一端である、併し記事の多くは、翠景の履歴に關係したもので、千代子の其れを補ふに必要と認めたからだ、先づ山田流の箏曲及其沿革から記さう、抑も箏には種々の流派があつて、最も古いのは八橋流、續いて繼山、生田、新生田、山田といふやうな順序で、各自區別を立てゝゐるやうなもの、云はゞ皆八

橋の流派を汲んでゐるも同然、其區別は寧ろ形式に過ぎないのであらう、尤も山田流は、更に生田流を改良したもので、箏の形や爪の形は、無論他派の其れとは異つてゐる、元來此の箏には、本曲といふものがあつて、此の本曲を作らなければ、何流と銘を打つだけの資格はない、現に山田流には『初音の曲』といふ本曲があるが、其の彈き方にも、眞、行、草の三種あつて、山田流は主に眞の手を彈いてゐる、とは云へ是等は、總て八橋流を創めた八橋檢校が拵へたもので、歸するところ、八橋流を何派でも彈いてゐる道理になる。

●山田流の沿革●　江戸に山田松黑と云ふ醫師がゐた、或時醫學研究の目的を以て、京都の方面へ出掛けたところ何時の間にか本業を棄て、心を箏曲の上に寄せるやうになり、熱心に修業をした結果、竟に箏の師匠になつて了つた、松黑に二人の門人

がある、一を山田檢校といひ、他を松黑檢校といふので、此二人は固より大勢の門人中では、一粒擇りの人物である、而も山田檢校は惣領弟子であつた、元來この山田檢校といふ人は、旗本の息子で、根が箏曲を嗜むところから、山田松黑の門に入つたので、苦心十年、頓て自分に新曲數十種を作り、是れを以て山田流の一派を擴めたのである、此人の直弟子で有名な者は、山登、山本、山瀬の三人、共に一方に雄視して、箏曲界の大立物であつた、山田流の箏の沿革はザット右の通りで、尙ほ委しい事は、他日稿を改めて書くことにしやう。

●山室翠景の略歷●　千代女の養父山室保嘉(號翠景)が、近く箏曲界の老練家であつた事は、苟くも指を斯道に染めた人で、知らぬといふ筈はない、此山室といふ姓はもともと家附の姓で、決して山登、山木の如く、藝名では無いのである、翠景が始

めて箏に志したのは、八歳の時で、當時有名な玉川檢校を師としたのであるが、渠の熱心は實に驚く斗りで、藝道の上達さながら旭日の昇るが如く、纔か數年にして師匠の代稽古を勤めるやうになつた、是れは固より師匠の丹精と、渠が人並すぐれた勉强の結果ではあるが、亦幾分か天才の力が與つてゐたのであらう、斯くして渠は十九歳まで修業したが、更に皷弓の研究を思ひ立つたので、幸はひ柳澤甲斐守の家臣植崎秋峰が其道に堪能であるといふ事を聞き、直に其門に入つて皷弓の一通りは修め了つた、要するに渠は非凡である。

千代子の略歴　千代子の生れた所は本所の相生町、小島永貞といふ人の末子であるが、六歳の時から、杵屋勝秀（故人勝三郎の弟子）について長唄を習ひ、十三歳まで稽古を繼續けてゐたが、其年不圖した譯で山室家へ養女に貰はれ、茲に箏の手解きをして貰

つたのは、固より養父の翠景であつた、既に一通りは養父によつて習ひ込んだ千代子は、更に他流の長所を會得せんものと、山登萬和、櫛田榮定などを師として、別に數年の研究を積んだ、其後養父と力を戮せて、朝夕大勢の門人を取り立てゝゐたが、養父が歿つた今日では、自分一人で其局に當つてゐる。

歌澤寅右衛門

（寅派家元）

妾ですか、明治五年生れで、今年三十八になります、生れた所ですか、日本橋の橘町で御座ゐますよ、父は本所五ッ目の材木問屋、信濃屋と云つて丸山傳右衛門です、異姉は今の黒田伯爵夫人で御座ゐます。

妾は性來歌澤に就ては、特殊の嗜好を有つて居りましたが、兎角藝道に熱心で御座ゐませんでしたから、度々三代目寅右衛門の叱言を聞きました、けれども師匠が全く家元を他の人に讓ると云ひ出しました時は、吃驚しましたよ、夫れからと云ふものは、之れでは行かぬと思ひまして一生懸命になりました。

最も七つ八つの頃から、常磐津を馬喰町の女師匠小登久さんに、一中節を菅野序

遊さんに學んで居りましたから、漸く先代も物になりさうだと思ひましたらうか、其後は家元を傍に讓るなんて言はんやうになりました、ところが先代は去る三十七年の十二月六日に亡くなりました、で、翌年の一月に妾が家元を襲いで、四代目寅右衛門となつたので御座ゐます。

妾の代になつて、名弘めを許したお弟子だけでも四十人の餘もありませう、其内で日本橋大傳馬の登代吉さん、元大工町の美代次さん、坂本町の美代野さんは伎倆で出來る方で御座ゐます、尤も先代の薫陶を受けたお弟子さんで、靜岡ばかりに十何人ありませうか。

家元の鼻祖寅右衛門は、四五十年も前の人でせうかね、江戸横山同朋町で壁屋を渡世にして居たさうですが、端唄が好きで〳〵お飯も止す位ゐだつたさうです、其

頃本所割下水に舊幕旗下の士で、笹本彦太郎と云ふ仁があつて、寅右衛門が大の贔負で、雪月花の風流には、必ず一しよに行つたものださうで、唄を唄ふのが常で、寅右衛門に指導を受けたさうです。

此の彦太郎と云ふ仁は、天晴れ端唄の名人となつて、安政年間に隱遁して山谷坊に別莊を構へまして、公邊の因みもありますので、遂に京都の嵯峨御所に願ひ出て、藝名を大和大掾歌澤弦三(別名を笹丸)と云ふ允可を受けたさうです、夫れから一月經つか立たぬに、寅右衛門も歌澤能登と云ふ允可を、嵯峨の御所に願つて差し許しになつたさうです。

其の嵯峨御所から下すつた鑑札と云ふのは、竪曲尺一尺三寸、横巾四寸一分の大さで、今では家の寶としてあります、夫れで歌澤の初代は笹本彦太郎さんで御座

ゐます、寅右衛門さんが文久二年戌の四月十五日に、向島木母寺に長五尺横二尺六寸の石で、彦太郎さんの墓を建てました、夫れに「笹の露丸めて月の光かな」としてあります、笹丸と云ふのを利かせたものでせう。

三代目の寅右衛門さんが、節付けしました隅田八景と云ふのがあります、

本調子「嗚呼がましくも八景や、こゝに隅田をうつし歌、澤邊に生る若草も、君にこゝろをつくづくし、人目づゝみの櫻がり、合ふつとお顔をみめぐりで、思ひのたけを晴嵐に合いひそゝくれて時鳥合なくか中洲に落る雁合淺草寺の淺からぬ合惠み

「尊き鐘の聲合夕日てりそふ吾妻橋はし塲もえんの渡し船合逢瀬まつ乳に秋の月しのび忍びし戀の淵今宵のしゆびを松間さへ雨に色增す寢屋の内むつごとつもる筑波根の合雪の合はだへに書殘すをよばぬ筆の跡や先つきぬなごりやをしむらむ。

哥澤芝金（芝派家元）

哥澤芝金を日本橋常磐木倶樂部に訪ねる、唯視れば未だ妙齡の花盛り、鳥渡丸顔の美人である、聞けば今年十八歳ださうな、之れで四代目芝金を背負つて立つたお師匠さんである。

こゝには、芝金の父柴田保氏も居れば、實の叔母三代目の芝金、今の土佐太夫も居る、三人は代る〳〵語る。

初代は舊幕の武家で、柴田彌三郎の三男、金吉と云ふ仁、此の人が昔の小唄節から一流を創めたのが歌澤、柴田金吉といふので柴金と付ける筈であつたが、家の苗字を丸取りにするのも如何と云ふので、芝と云ふ字は目出たい文字であるので、芝

金と命名したのださうだ。

此の初代芝金には面白い話がある、芝金の度胸を試す爲め、弟子の一人である八丁堀の大槻某と云ふのが、或夜稽古の最中に、不意に露の滴たる樣な刀で行燈を突通し、切尖を芝金の眼の前へ出した、スルト弟子は腰も拔かさん許りに驚いたが、芝金は平氣で稽古を續けて居たさうである、又初代は助高屋高助が守田座で、馬斬りを出した時分、斬れるか斬れぬか見に來て呉れと頼れて、承知して見に行つた後で、高助に「あれではまだ斬れない」と云つて、居合拔きの講釋を長時間聽かせた事もある、又能く柳橋から船を出して、弟子どもに歌澤を遣らせて見たり自宅で平床の時なんかは薄茶の手前を見せ、小碓の場合なんか、態々奥座敷から歌澤をかすめさせて樂んだ事もある、山縣含雪公の友達で、大岡大眉と云へる和歌に堪能な人が、

或る晩初代を訪れて、小酒盛の間に

「ほとゝぎす今一聲を聞かまほし月は冴ゆれど姿が見えぬエ、じれつたい何んとせう、辛氣くさいぢやないかいな」

と云ふ小唄を作つた、初代は結構な作であると云つて、頓て三絃を取出して、即座に節をつけ繰返し〳〵唄つた、大眉は之れ聞いて「一聲と思ひしものをほとゝぎす今宵あきたに聞くそうれしき」と一首を認めた、之れは今でも歌澤の家に殘つて居るさうだ。

此の初代の墓は、向島の百花園にある、之れは門派の者が建立したものであるが、初代最後の節付が大貳の郭公であつたので、切てもの追善にと此の歌を唄つたさうである。

二代目は男で、三代目は今の土佐太夫である、明治二十二年に名弘めをしたが、實に名人の域に達したと云つても溢美ではない、深川熊井町の生れで、南部屋と云ふ廻船問屋で、遊藝は、踊を市川梅枝に、下タ方を片田某に、琴を山田香鳥に、富本を豐里に仕込まれた、二十歳の頃初代芝金の養女になつたのである。

三代目芝金、六十歳に垂んとして、健康勝れぬ所から、柴田保氏の女錦子が四代目を襲名するに至つた、名弘會は昨年の秋十月、場所は常磐木倶樂部で、取つて僅に十七歳、ミッシリと稽古を初めたは近々三四年、夫れで萬事飲み込みが早くつて、咽喉は宜いし、歌澤の眼目たる、品能く、角張らずに圓く唄ふと云ふ骨法に叶つたさうである、夫れに踊は藤間梅香丈、生花は池の坊の池田正坊氏、茶は千家流の川上不白氏、琴は山田流で長澤登喜江丈、長唄は六太郎氏の手ほどきで吉住小三郎氏

に學び、字は小野鷲堂の門人ださうな、名弘めの會には、大阪から芝虎（二代目門人）芝爲代（三代目門人）芝勢津（同上）芝尾太夫、京都、名古屋、桑名からも師匠が來會して、唄は小原芝石の考案で千代の松風と云ふ「千代を壽く糸竹の、よゝの調の道の奥、傳へて高き足柄や、月も今宵は照りそひて、峰に雲なき松の風」と謠曲から出た唄で、花々しく遣つて退けたとの事である。

藤間勘右衛門（踊家元）

私の家業ですか、イヤハヤお話になりません、誠に以て椽の下の力持で、折角の骨折も皆な役者衆の手柄になつてしまひす、ハイ〳〵年ですか丁度取て七十になります、丹精をした弟子達も、役者になる仁が幾らもありますが、之も致方はありません、たゞ〳〵殘念に思ふ許りです。

藤間勘右衛門、住居は日本橋區濱町一丁目十一番地、俳優市川高麗藏の實父である、以前振付の全盛時代には、西川扇藏、市山七十郎、藤間勘兵衛の三人が、互角の勢で鼎立して居つたものださうだ、勘兵衛は勘右衛門の父で、畢竟勘右衛門は二代目である、先頃歿した花柳壽輔は、西川の家から別れて出たもので、吉原を根據

として一派を拵えた名人である。

壽輔が一派を拵えた時は、扇藏も七十郎も勘兵衛も、相繼で世を去つた跡で、花柳の勢は實に旭日冲天とも云ふべく、夫に搗て丶加えて今の左團治の祖父に當る、名人先代小團次が肩を入れたので、當時の芝居道は撫斬りの有樣であつた、勘右衛門が父に別れたのは十二歳の時で、何うしても一本立ちとなる事が出來ん、唯だ指を咬えて花柳派の盛んになり行くのを見る許り、兩派の間には壁が出來塀が築かれて、睨合ひの姿となつたが、風向が惡くて、藤間派の踊りは人が見返つても呉れず、一時芝居道から手を引くに至つた。

勘右衛門は、如何にもして藤間派の勢力を挽回しやうと力めた、夫には腕を熟達させねばならぬ、神佛に祈つて誓つたのである、其の苦心天に通じたか、技神に入

るの名手となつたのである、斯く藤間派が萎靡として振はなかつた時代に、熱心に通つた弟子がある、夫は九代目團十郎であつた。

團十郎は芝居道の天才で、團十郎以外に團十郎出でざるは誰れも知る所である、此の大立者が歌舞伎座に據つて、先代芝翫と共に二人道成寺を踊つた、其の非凡なる踊は、花柳派の出色である、芝翫を顏色なからしめたのである、爾うして團十郎は、一時芝居道から去つた、勘右衛門を振付け役として招いた、勘右衛門の今日あるは、團十郎の力與つて多しと云はねばならぬ。

夫れより藤間の名は麗然として天下を風靡するに至つた、爾うして壽輔起つ能はざるに至つて、振付けは藤間の一人舞臺となつてしまつたのである、五代目菊五郎も壽輔歿後、勘右衛門を用ゐたので今では羽左衛門も梅幸も、六代目菊五郎も勘右

衛門の弟子で、振付として遣つて居る、其他新橋柳橋は愚か、赤坂葭町、至る所の藝妓が勘右衛門の門人で、名取りの門人も尠くない、赤坂林家の靜江の如きも、勘右衛門四天王中の隨一人である。

新橋の實子五郎と云ふ、第一流の藝妓も勘右衛門の弟子である、勘右衛門は什麼かして確りした振付の後繼者を拵えたいと思つて居る、現在は大阪にも名古屋にも眞の振付はないさうだ、であるから尙更何とかしたいと思つて居る、最も弟子中にも、之れぞと思ふのが十數人はあるさうだ、けれども之れも遠からず椽の下の力持は廢して、役者になるであらうと歎息して居る。

勘右衛門の親戚に、藤間ふくと云ふのがある、之れは勘兵衛の養女で、伎倆は確かであるが女だけに困つて居る、藤間政彌、藤間勘八と云ふ弟子もある、之れも多

少の見どころはないではないが、ふくと同じく女である、勘右衛門は高貴の邸にも出入して、踊を敎えて居る、音樂學校にも行く、道樂はないが寢酒を飲むのが娯みである。

岸澤式佐

（常磐津三絃家元）

私は常磐津佐喜太夫の孫で御座います、七代目の養子になりましたのが九歳の時です、稽古は養父の妹……私には叔母に當る古式の許に通つたのですが、私の宅が淺草の富士横町で稽古に往く叔母の家が石町でしたから、往き歸りには屹度藏前を通つたのです、其時分は藏前は實に賑やかなもので豆藏などが出てゐたものですからツイ口を開いてこれを見てゐたり何かするものですから毎日のやうに養父からお目玉を頂戴しましたが、頑是のない小供だから馬の耳に念佛で不相變道草を喰つて居たものですから仕舞ひには追々帳面を拵らへられました、マア只今で申せば學校と家庭の通信簿見たやうなものですね、家を出る時は養父が幾つ時に出たと帳面に

附けたのを持つて叔母の所へ往き、稽古を濟ませると今度は叔母が今日は何を稽古して何時に歸つたと書いて渡すのですから斯うなつちやアモウ油を賣る譯には行きませんやアね、それからといふものは藏前を通る時は本當に泣き度くなりましたよ、

明治五年私が十四の時でした、己佐吉となつて新富座で初舞臺を勤めました、狂言は五變化の淨瑠璃で先代芝翫が布袋の川渡りを演た時でした、此時は三味線彈ちやアなくつて太夫だつたのです、何しろ此時分は常磐津道がゴタ〳〵してゐたので太夫も三味線も區別なく常磐津何某といふ三味線彈や岸澤誰といふ太夫があつたのです、十八の時に火事に遇つて身代を滅茶々々にして仕舞ひましたので十九から旅稼きをする事となりました、名古屋に先づ行きますと丁度芝翫の阿爺さんが來てゐたので、夫れから一緒になつて京大阪から四國九州と諸國を經廻つて二十三の年に

久し振で歸京しました、此時分もまだ太夫兼帶であつたのです、

八代目式佐となりましたのが明治二十四年でしたが、仔細あつて先代古式部の弟の古式部に一時家元は預けましたが、この古式部は八代目の家元でもあり且つは又八代目古式部でもあるといふ事になりましたので、廿七年に又私が岸澤式佐となつたので、今では九代目ですが、實際は私一人で八代目と九代目を繼いだやうな譯で餘程其處のところが變手古です、

常磐津の難かしいところといつたら口說きめいたものでしやうが、私などは憚りながら何を演らせたつてソツ許りなのだから澄したものでさア、それにお座敷は芝居の舞臺よりも餘程骨が折れますよ、なぜといつて左樣でしやう、芝居では役者衆の藝を見ながら聞くのですがお座敷と來ると一本槍だから堪つたものではありませ

ん、申すまでもなく成田屋さんは名人であつたあの方の踊に出ると全く藥に爲りました、音羽屋さんからも毎日注文をされたり小言を言はれたりして修業したものです、

私は芝居をするのが道樂なのです、東京で三度遣りました、何しろ私の頭は感心なものですよ、音羽屋さんの鬚が一分一厘も違はないのでしたからね、餘所に芝居氣も出たのです、一番始めに演つたのが新富座で仲助の日吉丸、私は蜂須賀の子分、尼ケ崎の十次郎、それから誇垂に名古屋山三といふのです、何うです恐れ入つたものでせう、二度目は東京座で先代萩の絹川に冲の井、男之助三世相の六三と都合四役三度目は又新富町で由比ケ濱の梶原に、討入の五郎といふのです、何んだつて好きな方ですからお見物は何んといつたつて當人大得意なのだから堪りません、借金

取なんどが來たつてビクともしやアしませんでした、

その外の道樂はマア手細工ですね、ヘタな木工のやうに細かい木片などをいぢり廻して手廻りの道具や箱のやうなものを拵へるのが樂しみです、

失策談ですか、そりやアモウ澤山有ますがね、東京座で澤潟屋さんが○○を踊つた時には實に閉口しました、其時分は貧乏の頂上で時計一つなかつたので毎日時間を間違へて大きに弱りました、人間貧乏しちやア駄目ですね、寫眞ですか、新らしいのが一寸手許にありませんがこれでは何うです、此の時分には若くつて男が好かつたから美しい女の子にワイ〳〵言はれたものですよ、ハツハヽヽ、

竹本綾瀬太夫

（義太夫）

これは〳〵能うこそお訪ね下さいました、ナニ私の一代記ですか、飛んでもない、モウ御承知の通り東京は男より女の方が全盛で御座いまして私共はカラ駄目です、それに先頃大病を遣りましたのでモウ仕方がありません、亡くなられました、師匠は私の年にはまだなか〳〵達者でしたが私は意氣地がありません、ハイ私しの生れましたのは京都で御座います、東京でばかり御贔負になつて居ますが全くは上方贅六なのです、私の親は金地院東照宮の宮大工の棟梁で御座いまして三十人扶持を頂戴致して居りましたのです、然るに私しが斯樣に義太夫語りとなりました動機＝何んだか話が堅苦しくなりますがマアお聞き下さいまし、其筋道はかうです。

丁度私が十五歳の頃から稽古を始めましたので、一番最初は親爺の樂しみに教へられましたのですが、私も此の藝事が好きで御座いましたから一生懸命に覺えました、親爺の稼業――詰り大工ですな――これは其方除けで只義太夫ばかりを熱心に稽古致しまして、十九の春を迎へました時が明治の御一新でした、それが爲めに今までお上から頂いて居りました御扶持には離れて仕舞ひましたし、續いて親爺は家業の心配が基で永の別れとなりましたので、俗にいふ藝が身を助ける不幸の身となり、二十六歳の時に東京に上りまして、綾瀬太夫の弟子となりました、其時分まで師匠は相生太夫と名乘つて居りましたが、兄弟分の約束をした相撲の相生さんが小結に昇進して綾瀬川と改名したので自分も綾瀬太夫と改名されましたので、其前名の相生太夫が明いて居りましたゆゑ私が其名を貰つて相生太夫となつたのです、其

後さやう明治二十二年だと思つて居ります、大坂へ修業に參りまして文樂座へ丁度五年ばかり出て居りました、此時に私は四代目祖太夫と改名致しましたが、五年程で又もや御當地に戻つて來ましたところ、お客樣は昔に代らず御贔負にして下すつて且つはいろ〳〵御注告もありましたので程なく又元の相生太夫を名乘りました譯です、其内に師匠は大和菊水大椽と改名する筈でありましたが都合に依つて廢めまして綾翁となられました、其時分にも私しは綾瀬太夫を相續せよとの有難い御言葉を下されました方もありましたが名人と言はれた師匠の名を未熟の私風情が相續する事などは思ひも寄りませんので御辭退したのですが、明治四十年師匠の七回忌の時に只今の名前を相續致しましたのです。

私の義太夫に關する意見ですか、夫れは困りましたなア、そんな六ケ敷い事を仰

しやられるとイヤに窮屈になつて何も申上げる事は出來ませんが、折角のお尋ねですから一寸胸か浮かんだ事を二三申上げませう。

凡そ物には裏表と申して表と裏のありますことは私が申すまでもありません、マア早い話がさうでせう、道路にしても――市街の大通で立派な三階四階の店の並んだところでも勝手には狹い溝板を通路としてあるところを通らなければなりませんやうなものです、又一片の紙きれにしましたところでさうで裏表は常に離れる事の出來ないものであります、ソコデ私共の日々語つて居りまする義太夫で御座いますが、これにも表裏があります、義太夫の聲は表の聲であるか又は裏の聲であるかと申しますれば、私は裏の聲を使ひ分けるのだと思ひます、これは敢て義太夫のみに限られたのではありません、新内でも常盤津でも長唄でも乃至一中節等あらゆる

音樂に關したものはすべて裏の聲でなくては語つたり又は謠つたりされるものではありません、他の御方はイザ知らず、私は義太夫を語りますのは腹のズン底から聲を出して咽喉や口で語るやうな事は決して致しません、只だ口では笛を吹く心地で居ります、義太夫も一つの藝術――音樂であると致しますれば、唯綺麗なばかりでは不可ません、イヤ義太夫ばかりぢやアありません、庭などでもさうでせう、庭だからといふて植木ばかりぢやア何んの風情もない、岩もあれば築山もある、流れ――水があれば魚も放つ、亭の屋根を草葺きにするといふのも詰りは風情を添へるので、こうやつてこそ初めて庭らしい庭となるのです、故に義太夫では節に言あり、言葉に節ありと申して單に三味線にばかり拘泥し、絃に今せやう〳〵と致しますと無趣味になります、勿論絃に外れたらそれこそ調子外れだから藝になりませんが、言を

換へて申せば絃と付かず離れず、太夫と三味線彈との藝が言ひ合したやうにシヽ、リ合つて行かねば本當の義太夫ではないので、マア死んだ義太夫とでも申しますのでせう。

芝居で御座いますと人物が一々所作をして見せますので臺詞が少々位ゐ拙くつても見て居られますが、義太夫は一人で裏の聲を幾人もに語り分けねばなりませんから大變六ケしう御座います、即ち形なくして善惡邪正、美醜黑白を眼の前に見えるやうに御客樣を感動させて始めて。氣のある義太夫となるのです、詰り義太夫の上手下手は、この聲一つで人物を分け得られると否とに依つて分るのです。

竹本攝津大掾

（義太夫）

竹本攝津大掾は義太夫界の覇王である、否義太夫界といふ少さな部分丈ではない我國藝界の覇王である、彼れは天保七年の三月十五日に大阪市順慶町三丁目で孤々の聲を揭げたのである、彼れの實文は伊勢屋七三郎といふ塗物問屋であつた、幼名は森吉太郎といひ五歲の時に同市釣鐘町上の町の大工棟梁大和屋伊八方に養子となつたのである、今の本性二見は即ち養家の性で、養子となると間もなく龜次郎と改名したが其後今の金助となつたのである。

彼れが義太夫語となつた動機は斯うである、養父の伊八が素人義太夫語で方々の天狗連で鼻をうごめかして語り廻るうちに、彼れも何時しか聞覺えに淨瑠璃を唸る

やうになつたのである、伊八は自分の好むところではあり且つは素性の好い藝であつたから十一歳の時に竹澤龍之助といふ三味線彈の弟子としたのであつた。

彼れは好める道を養父から公に許されたのであるから嬉しくつて堪らない、一生懸命に稽古をしたのは好いが肝心の大工は其方除けとなつて、終には養父も手を燒いたが、彼れが飽くまで浮瑠璃で身を立てやうと決心して動かないので、素々自分も好きで遣らせたのだからこれを許す事となつたのである。

大掾はこれより先き既に竹澤龍之助では十分なる修業が出來ないのを知つて三代目鶴澤清七の弟子となり、又三代目野澤吉兵衛の弟子となつて三味線の稽古に熱中してゐた、安政五年に初代越路大夫の子に當る三代目吉兵衛の世話で五代目竹本春太夫の弟子となつて竹本南部太夫となつたのである、これ大掾が義太夫語りとし

て今日の地位を占める第一歩であつたのである、大掾は南部太夫となるや吉兵衛に伴はれて地方を巡業しつゝ一方ならぬ教訓を受け、萬延元年に至つて一座と共に江戸に來つて二代目越路太夫となつたのである、これは初代越路太夫が江戸で沒したので土地では馴染の名であるからであつた、これには無論吉兵衛が引立つたので、此の時に始めて眞打の披露をしたのである、

大掾は斯の如く三代目吉兵衛の取立てに依つて順潮に地位を高め遂ひに眞打とまでなるに至つたが、文久二年七月に大恩人たる吉兵衛が病沒したので彼れは忽ち失望落膽の淵に沈んで仕舞つた、夫れも其筈である、今までは方向を指示する磁石があつたので一定の航路を少しも違はずに進んで來たが、一朝其磁石は暴風雨の爲めに奪ひ去られて方向を失つた上に、天候は暗澹として咫尺を辨せないのと同一であ

るから大椽が落膽したのも無理ではない、然し天はこの不世出の天才を捨てなかつた、大椽は落膽のうちにも氣を取直して一座にゐた野澤勝鳳の紹で不相變お江戸の席に出勤してゐた、其間に一度越路太夫から住太夫と名乘つた事があつた、これは吉兵衛が在世中の事で、初代越路太夫が熱心の名であつたからで、詰り吉兵衛が亡父に對する孝心から三代目に改名させたのである。

大椽は吉兵衛の沒後も依然として東京で興行を續けてゐたが、何時までも師匠に別れて勝手な淨瑠璃をやつてゐたのでは身の爲めにならぬと自覺して文久三年六月に久し振で故郷の大阪に歸つたのである、攝津大椽の義太夫は今日でも美音に任せて本來の妙趣を語り崩すといふ嫌があるが、これは恐らく江戸で興行時代に其因を爲したのであらう。

京都の三味線彈で近來の大名人と謳はれた故人鶴澤友二郎は大椽が其門に敎を乞はんとした時に、彼れの淨曲を聞いてお前は豪い嘘を語るなア、而し嘘もそれ位に語りこなせればモウ他人の義太夫を敎はるには及ばんと評したさうである。

斯くて大椽は江戸から歸坂したが當時大阪にも住太夫があつたので再び元の越路太夫となつて名聲次第に揚つて來て、春太夫の薫陶を受けてゐた、明治三十六年一月に一度師春太夫の名跡を相續した、大椽はこれより以前に畏くも故小松大將宮殿下から攝津大椽を受領してゐたが、三十五年九月十日に宮殿下が薨去遊ばされたので其儘改名もしなかつたが三十六年の五月一日に御靈文樂座で大椽と改名の披露をした、此時の讀物は妹脊山で、永年大椽と反目してゐた大隅太夫も兜を拔いて大椽の軍門に降り、其改名披露の口上を述べたのであつた。